2015 年度修士論文

大学ラグビーにおける選手獲得戦略

Strategic Recruitment in the Top Flight of Japanese University Rugby

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

トップスポーツマネジメント

5015A324-2

山下　大悟

Yamashita Daigo

指導教員　平田竹男　教授

目次

第１章　序論 1
　第１節　背景 1
　　第１項　学生スポーツにおけるリクルーティングの重要性 1
　　第２項　大学ラグビーを取り巻く環境 1
　　第３項　1975 年以降の全国高等学校ラグビーフットボール大会優勝、準優勝校 1
　　第４項　関東ラグビー対抗戦 3
　第２節　先行研究 4
　第３節　目的 5
第２章　研究手法 6
　第１節　入試形態調査 6
　　第１項　調査内容 6
　　第２項　対象年度 6
　　第３項　調査方法 6
　第２節　選手獲得分析 6
　　第１項　新人選手獲得の定義 6
　　第２項　収集するデータ 6
　　第３項　分析方法 6
　第３節　ユース代表選手獲得分析 7
　　第１項　ユース代表選手定義 7
　　第２項　調査対象期間 7
　　第３項　分析方法 7
第３章　研究結果 8
　第１節　入試形態調査 8
　　第１項　推薦獲得枠が及ぼす影響 8
　　第２項　大学別監督人数及び任期 9
　　第３項　スポーツ推薦内定時期 9
　第２節　選手獲得分析 10
　　第１項　早稲田 10
　　第１項　帝京 13
　　第２項　慶應 18
　　第３項　明治 22
　　第４項　筑波 26
　　第５項　5 大学の FW・BK における獲得数経年変化 30

第３節　ユース代表選手獲得分析 31
第１項　各大学合計獲得人数及び経年比較 31
第２項　各大学の年度に有するユース代表数と戦力要員 32
第３項　前期(2000～2006 年)、後期(2007～2012 年)間獲得人数比較 33
第４項　ポジション別獲得割合 33
第４章　考察 35
第１節　選手獲得 35
第１項　ユース代表選手の獲得 35
第２項　強豪校からの獲得 36
第３項　部員輩出校と戦力要員輩出校 36
第２節　入試形態の違い 37
第１項　スポーツ推薦枠の定員 37
第２項　内定時期 37
第３項　留学生制度拡大の可能性 38
第４項　研究の限界 38
第５章　結論 39
第６章　謝辞 40

図表目次

図 1　早稲田部員輩出校 10
図 2　早稲田戦力要員輩出校 11
図 3　全部員 FW、BK 比率 12
図 4　年度別ユース代表選手獲得人数（早稲田） 13
図 5　ユース代表選手が戦力要員に占める人数（早稲田） 13
図 6　帝京部員輩出校 14
図 7　帝京戦力要員輩出校 15
図 8　全部員 FW、BK 比率 16
図 9　年度別ユース代表選手獲得人数（帝京） 17
図 10　ユース代表選手が戦力要員に占める人数（帝京） 17
図 11　慶應部員輩出校 18
図 12　慶應戦力要員輩出校 19
図 13　全部員 FW、BK 比率 20
図 14　年度別ユース代表選手獲得人数（慶應） 21
図 15　ユース代表選手が戦力要員に占める人数（慶應） 21
図 16　明治部員輩出校 22
図 17　明治戦力要員輩出校 23
図 18　全部員 FW、BK 比率 24
図 19　年度別ユース代表選手獲得人数（明治） 25
図 20　ユース代表選手が戦力要員に占める人数（明治） 25
図 21　筑波部員輩出校 26
図 22　筑波戦力要員輩出校 27
図 23　全部員 FW、BK 比率 28
図 24　年度別ユース代表選手獲得人数（筑波） 29
図 25　ユース代表選手が戦力要員に占める人数（筑波） 29
図 26　FW 獲得数経年変化.....30
図 27　 BK 獲得数経年変化 31
図 28　大学別ユース代表選手合計獲得人数 31
図 29　年度別ユース代表選手獲得人数 31
図 30　大学別ユース代表選手所属人数の推移 32
図 31　前後期別獲得人数調査結果 33
図 32　ポジション別獲得割合 34

表 1　全国高校ラグビー歴代優勝、準優勝校一覧（１９７５年以降） 2

表 2　関東大学ラグビー対抗戦 A グループ成績（１９９７年以降） 3
表 3　年間獲得人数概要 8
表 4　2000～2012 年大学別監督人数 9
表 5　スポーツ推薦内定時期 9
表 6　早稲田調査結果まとめ 11
表 7　帝京ラグビー部調査結果まとめ 15
表 8　慶應調査結果まとめ 19
表 9　明治調査結果まとめ 23
表 10　筑波調査結果まとめ 27

第１章 序論

第１節　　背景

第１項　学生スポーツにおけるリクルーティングの重要性

学生スポーツで有望新人選手を効率的に獲得することは、チームの強化法を考える際に非常に重要である。選手が在籍可能な期間は高等学校（以下、高校）で 3 年、大学で 4 年と限られたものとなっている。さらに、学生スポーツにおいて公式戦に出場する選手のほとんどは最高学年の選手である。以上の点から学生スポーツの大きな特徴として、ひとりの選手が活躍できる期間が非常に短く、選手の流動性が極めて高いことが挙げられる。プロスポーツにおいては､ひとりの選手が 10 年以上､同一チームに在籍する事例も多々あり、その選手が長年チームを牽引することも可能であるが、学生スポーツにおいては不可能である。そのため、学生スポーツで長期的に戦力を維持し、好成績を残し続けるためには、有望新人選手を継続的に獲得することが重要となってくる。

第２項　大学ラグビーを取り巻く環境

野球、サッカーといったメジャースポーツと比較した場合、大学ラグビーを取り巻く環境は特異なものとなっている。特異な理由は二つあり、一つは、選手の高校卒業後の進路である。野球、サッカーは高校卒業後、大学に進学せずにプロ野球や J リーグのチームに加入する選手が例年一定数存在する。また、ユース代表に選出されている各年度の有力選手ほどプロに進む傾向が強いという特徴がある。ラグビーは高校卒業後にトップリーグのチームに加入する選手はほとんど存在せず、ユース代表に選出される有力選手においても、そのほとんどが大学に進学する。そのため、大学ラグビー部における選手獲得の際の競合はトップリーグのチームではなく他の大学ラグビー部に限られている。

もう一つが大学ラグビーの人気である。日本のスポーツにおいて、プロリーグや実業団の試合の方が学生スポーツの試合に比べて観客動員数は多く、日本代表の試合の観客動員数がプロリーグの観客動員数を上回ることが通常である。しかし、2013 - 2014 年シーズンにおける日本ラグビー界の各カテゴリーのトップチームである、早稲田大学（以下、早稲田)、サントリーサンゴリアス、日本代表の平均観客動員数を比較すると、早稲田の 13,104 人がトップであり、日本代表の 11,410 人、サントリーサンゴリアスの 6,883 人と続く。このことから日本のラグビーにおいては大学ラグビーがラグビー界の人気を牽引していると言っても過言ではない。

以上の点から、日本の大学ラグビーは強化、人気の両面において極めて重要な存在となっている。

第３項　1975 年以降の全国高等学校ラグビーフットボール大会優勝、準優勝校

1975 年に行われた第 55 回全国高等学校ラグビーフットボール大会(以下、全国高校ラグビー)以降の歴代優勝、準優勝校を表 1 にまとめた。

表 1　全国高校ラグビー歴代優勝、準優勝校一覧（１９７５年以降）

回	年度	優勝校	スコア	準優勝校
55	1975（昭和 50）	国学院久我山	25-9	目　黒
56	1976（昭和 51）	目　黒	29-0	花　園
57	1977（昭和 52）	大工大高	20-12	秋田工
58	1978（昭和 53）	国学院久我山	40-6	黒沢尻工
59	1979（昭和 54）	目　黒	16-14	国学院久我山
60	1980（昭和 55）	伏見工	7-3	大工大高
61	1981（昭和 56）	大工大高	13-4	秋田工
62	1982（昭和 57）	国学院久我山	31-0	目　黒
63	1983（昭和 58）	天　理	18-16	大分舞鶴
64	1984（昭和 59）	秋田工	9-4	相模台工
65	1985（昭和 60）	大東大一	8-0	本　郷
66	1986（昭和 61）	国学院久我山	22-6	熊谷工
67	1987（昭和 62）	秋田工	9-4	相模台工
68	1988（昭和 63）	茗渓学園		大工大高
		（昭和天皇崩御により決勝は行わず両校優勝）		
69	1989（平成元）	天　理	14-4	啓光学園
70	1990（平成 2）	熊谷工	19-9	天　理
71	1991（平成 3）	啓光学園	28-8	国学院久我山
72	1992（平成 4）	伏見工	15-10	啓光学園
73	1993（平成 5）	相模台工	19-6	東農大二
74	1994（平成 6）	相模台工	27-12	長崎北陽台
75	1995（平成 7）	大工大高	50-10	秋田工
76	1996（平成 8）	西陵商	26-25	啓光学園
77	1997（平成 9）	国学院久我山	33-29	伏見工
78	1998（平成 10）	啓光学園	15-12	大工大高
79	1999（平成 11）	東海大仰星	31-7	埼工大深谷
80	2000（平成 12）	伏見工	21-3	佐賀工
81	2001（平成 13）	啓光学園	50-17	東福岡
82	2002（平成 14）	啓光学園	26-20	東福岡
83	2003（平成 15）	啓光学園	15-0	大分舞鶴
84	2004（平成 16）	啓光学園	31-14	天　理
85	2005（平成 17）	伏見工	36-12	桐蔭学園
86	2006（平成 18）	東海大仰星	19-5	東福岡
87	2007（平成 19）	東福岡	12-7	伏見工

88	2008（平成 20）	常翔啓光学園	24-15	御所工・御所実
89	2009（平成 21）	東福岡	31-5	桐蔭学園
90	2010（平成 22）	東福岡	31-31	桐蔭学園
		（両校優勝）		
91	2011（平成 23）	東福岡	36-24	東海大仰星
92	2012（平成 24）	常翔学園	17-14	御所実
93	2013（平成 25）	東海大仰星	19-14	桐蔭学園
94	2014（平成 26）	東福岡	57-5	御所実

70 年代から 90 年代にかけて連覇を果たした高校は相模台工業のみで、その他に国学院久我山（以下、久我山）、秋田工業高校、伏見工業高校（以下、伏見工）といった強豪校がしのぎを削る群雄割拠の時代であった。常翔学園(旧、大阪工大高)のようにいずれの年代においても優勝、準優勝を経験している高校も存在するが、ごくわずかである。1990 年代から 2000 年代前半にかけては啓光学園が、2000 年代後半以降は東福岡高等学校（以下、東福岡）がそれぞれ高校ラグビー界を席巻しているが、一方で 1970 年代から 1990 年代の強豪校は近年、優勝もしくは準優勝を経験していない。また、啓光学園、東福岡の両校に関しても躍進が際立った期間以外においては優勝、準優勝を果たした経験はほぼ皆無である。このことから、高校ラグビーは時代によって超強豪校が変遷している。

第４項　関東ラグビー対抗戦

関東ラグビー対抗戦は、関東ラグビーフットボール協会が主催し行われている大学生年代のリーグである。大学ラグビーにおいてはその他に関東大学ラグビーリーグ戦、関西ラグビーリーグといったリーグ戦が存在し、それらの成績上位校が一堂に会する全国大学ラグビーフットボール選手権大会における通算優勝回数は、関東ラグビー対抗戦がトップである。加えて、大学ラグビー界の伝統校として知られる、早稲田、慶應義塾大学（以下、慶應）、明治大学（以下、明治）の 3 校が全て所属しており、大学ラグビーの最高峰である。

関東大学ラグビー対抗戦において、A グループ(実質 1 部リーグ)、B グループ(実質 2 部リーグ)の２グループ制が導入された 1997 年以降の A グループの成績は表２の通りである。

表 2　関東大学ラグビー対抗戦 A グループ成績（１９９７年以降）

年度	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位	7 位	8 位
1997	明治	早稲田	帝京	筑波	日体	青学	慶應	東京
1998	明治	慶應	早稲田	筑波	日体	青学	東京	
1999	慶應	帝京	明治	早稲田	日体	筑波	青学	東京
2000	慶應	明治	早稲田	帝京	筑波	東京	日体	青学
2001	早稲田	慶應	明治	帝京	日体	筑波	青学	東京

2002	早稲田	慶應	明治	帝京	筑波	日体	青学	東京
2003	早稲田	帝京	筑波	明治	慶應	日体	青学	立教
2004	早稲田	慶應	明治	帝京	筑波	日体	立教	青学
2005	早稲田	帝京	慶應	明治	日体	筑波	立教	青学
2006	早稲田	明治	慶應	帝京	日体	筑波	青学	立教
2007	早稲田	明治	慶應	帝京	筑波	日体	成蹊	青学
2008	帝京	早稲田	日体	慶應	筑波	明治	成蹊	立教
2009	早稲田	慶應	筑波	帝京	明治	日体	成蹊	立教
2010	早稲田	慶應	明治	帝京	筑波	成蹊	日体	立教
2011	帝京	早稲田	明治	筑波	慶應	青学	日体	成蹊
2012*	筑波	帝京	明治	早稲田	慶應	日体	青学	立教
2013	帝京	早稲田	慶應	筑波	明治	青学	成蹊	日体
2014	帝京	早稲田	明治	慶應	筑波	青学	立教	明学

* 2012 年は筑波、帝京、明治の 3 校優勝

1997 年以降、最多の優勝回数を誇るのは早稲田で計 9 回の優勝を経験している。以下、帝京大学（以下、帝京）6 回、明治 4 回、慶應 2 回、筑波大学（以下、筑波）1 回と続き、優勝を経験しているのはこの 5 校のみである。また、2 グループ制が導入されて以降、昇降格が実施される年度も存在するが、一度も B グループに降格した経験のない大学は、上記の 5 大学のみである。

第２節　　先行研究

背景より、学生スポーツは強豪校の変遷の趨勢が早く、またチームに所属することのできる期間が短いため、リクルーティングが重要であることが分かった。更に、日本のラグビー界において、大学ラグビーは強化、人気の両面で非常に重要な役割を果たしていることをうかがい知ることができた。

海外に目を向けると、アメリカの全米体育協会（以下、NCAA）で運営されている大学スポーツにおいてリクルーティングに関する研究が見受けられた。ラクロス選手の大学選考要因を調査したもの(Pauline 2010)やアメリカンフットボール選手のリクルーティングプロセスの研究(Dumond ら 2007)、リクルーティングの重要性を説いたもの(Caro 2012)がある。また、アメリカだけではなく、オーストラリアンフットボールリーグ選手のリクルーティングの変遷(Booth 1997）といったように、海外においてはリクルーティングを対象にした研究が複数の競技で存在した。ラグビーに関しても、英国ラグビー界でアマチュア選手からプロ選手に転換する支配的な論理の研究(O’Brien ら 2004)やオーストラリアンナショナルラグビーリーグ選手を対象に身体構成組織の季節変化が怪我に関係する研究(Georgeson 2015)があるが、選手のリクルーティングに関する研究は見当たらなかった。

日本では、九州の一流高校選手の進路決定要因を調査した研究(浅沼ら 1993）が存在するものの、大学スポーツのリクルーティングに関する研究は見当たらない。そして、ラグビーのリクルーティングに関する研究も、筆者が早稲田ラグビーを対象としてリクルーティングの調査を行った研究のみであり、大学のリクルーティングの状況は不明な点が多い。

以上の点から、ラグビーにおける広範なリクルーティングを調査する本研究は、新規性があるという点に学術的意義を見出すことができ、かつ将来的な大学ラグビーないしは日本ラグビーの発展に寄与するといった点に社会的意義を見出すことができると考える。

第３節　　目的

本研究は早稲田、帝京、明治、慶應、筑波の入試制度及び選手獲得状況を明らかにすることで、大学ラグビー選手のリクルーティングに関する問題を探索することを目的とした。

第２章 研究手法

第１節　　入試形態調査

第１項　調査内容

各大学によって入試形態が異なる。そのため、どのような入試形態で選手を獲得し、各大学が推薦制度によってどのくらいの人数を獲得しているのかを明らかにした。

第２項　対象年度

本研究では研究期間の中で最も近年である 2013 年度を調査期間とし、現状にもっとも近い選手獲得状況を調査した。

第３項　調査方法

対象大学の 5 校の関係者にインタビューを行い、現状を明らかにした。

第２節　　選手獲得分析

第１項　新人選手獲得の定義

大学による「選手獲得」とは通常、大学が主体的に特定の高校生をスカウトし、スポーツ推薦制度の様な形で入学させる形を示すことが想定される。しかし、本研究において、「選手獲得」が対象とする部員の定義として、大学からスカウトされていない部員も含め、入部した全ての部員を大学の新人選手獲得の結果とみなし、2004 年から 2013 年に所属している全ての部員を調査の対象とした。

第２項　収集するデータ

2004～2013 年に各大学のラグビー部に入部した全選手の入学年度、出身校、ポジション、ユース代表経験、在学期間中の関東ラグビー対抗戦出場時間を調査しデータベース化した。なお、ラグビーのポジションは FW と BK の 2 つに大きく分けることができる。FW のポジション（背番号）には PR(1、3)、HO(2)、LO(4、5)、FL(6、7、8)があり、BK のポジション（背番号）には、SH(9)、SO(10)、CTB(12、13)、BK3(11、14、15)がある。

第３項　分析方法

関東大学ラグビー対抗戦 A グループに所属する早稲田、慶應、明治、帝京、筑波の 5 つの大学の選手獲得に関する示唆を得る為に、5 つの大学に対する各高校の輩出状況を以下の 3 点の方法から明らかにする。

１）輩出校

まず、試合出場の有無に関わらず各大学ラグビー部が部員を、どのような高校から獲得しているのかを明らかにする。各大学のラグビー部に 2004 年度から 2013 年度に在籍した全部員の出身高校の調査を行い、高校ごとに部員数を集計する。その中で、10 シーズンで

10 人以上の部員を輩出した高校を部員輩出校とし、部員の輩出人数及び、総部員数に占める部員輩出校の部員数の割合を算出する。

２）戦力要員輩出校

公式戦に出場する主戦力となる部員を、どのような高校から獲得しているのかを明らかにする。まず、2004 年シーズンから 2013 年シーズンの 10 シーズンに所属した全部員の各シーズンにおける関東大学ラグビー対抗戦出場記録の調査を行う。そして、公式戦登録人数が 23 人であることから、各シーズンにおける平均出場時間上位 23 人を「戦力要員」と定義し､10 シーズンで延べ 230 人を抽出する｡この 230 人の戦力要員の出身高校を集計し、10 シーズンで 10 人以上の戦力要員を輩出した高校を「戦力要員輩出校」とする。

なお、集計方法は、実際の部員の人数ではなく、各部員が戦力要員となったシーズン数で集計を行う。つまり、ある部員が 2004 年、2005 年の 2 シーズンの戦力要員となった場合、その高校の戦力要員輩出数は、2 人と集計される。

第３節　　ユース代表選手獲得分析

第１項　ユース代表選手定義

ユース年代におけるラグビー日本代表は U-19、U-20、高校日本代表等年度により様々なものが存在する。本研究においては、大学入学後に成長したことで代表に選出した選手を除外するために､大学入学前に選出される U-19 及び高校日本代表の 2 つの代表に選出された選手をユース代表選手と定義する。

第２項　調査対象期間

2004 年シーズン時点で大学 4 年生であるユース代表選手が 1 年生であった 2001 年から 2013 年までを対象とする。

第３項　分析方法

各大学が対象期間において、何人ユース代表選手を獲得しているか調査した。その後対象期間ごとにユース代表選手が各大学に何人所属しているか調査した。また、ユース代表選手が各大学の戦力であるか測るために戦力要員にユース代表選手が何人占めるか調査し、戦力要員になっているユース代表選手のポジションをみて、どのポジションのユース代表選手が各大学で戦力になっているか調査した。

第３章 研究結果

第１節　　入試形態調査

第１項　推薦獲得枠が及ぼす影響

表 3　年間獲得人数概要

	早稲田	帝京	慶應	明治	筑波
スポーツ推薦(目安)	2 人	25 人	0	19 人	5 人
その他の推薦	自己推薦		AO 入試		
附属･系属高の有無	○	○	○	○	×
外国人選手の獲得	×	○	×	×	×
総獲得人数(目安)	30～40 人	35 人	40 人	20～25 人	15～20 人

各大学入試制度の違いにより、スポーツ推薦や自己推薦、AO 入試、附属･系属校からの入部、外国人留学生、一般入試等でそれぞれ獲得人数が異なることが明らかとなった。表 3 は 5 大学が年間に獲得する人数の概要である。

早稲田はスポーツ推薦枠で毎年 2 人獲得できることが分かった。また、自己推薦制度の人数によって推薦獲得人数が変わってくることが分かった。この推薦獲得人数に加えて、附属･系属校からの入部、一般入試によって、年間 30～40 人の選手を獲得していることが分かった。

帝京はスポーツ推薦枠で 25 人を獲得していることが分かった。この獲得人数に加えて、附属･系属校からの入部、一般入試また外国人留学生の獲得で年間 35 人程度の選手を獲得していることが分かった。

慶應は毎年の決まったスポーツ推薦枠は 0 人であり、AO 入試の合否によって推薦による獲得人数が変わってくることが分かった。この推薦獲得人数に加えて、附属･系属校からの入部、一般入試によって、年間 40 人程度の選手を獲得していることが分かった。

明治はスポーツ推薦枠で 19 人程度を獲得していることが分かった。この獲得人数に加えて、附属･系属校からの入部、一般入試によって、年間 20～25 人程度の選手を獲得していることが分かった。前述した 3 大学より年間の獲得人数が少ない背景に、選手の寮の定員数が 25 人程度しかないという点があることが分かった。明治において、スポーツ推薦や附属･系属校からの入部以外の推薦で選手を獲得しているかどうかは分からなかった。

筑波はスポーツ推薦枠で獲得できる人数は 5 人程度であることが分かった。この推薦枠に加えて、一般入試によって、年間 15～20 人程度の選手を獲得していることが分かった。筑波において、スポーツ推薦や附属･系属校からの入部以外の推薦で選手を獲得しているかどうかは分からなかった。

第２項　大学別監督人数及び任期

表 4　2000～2012 年大学別監督人数

	早稲田	帝京	慶應	明治	筑波
人数	5	1	6	4	2
任期	2～4	変化なし	2	2～4	5～10

各大学のリクルートを率いている監督の人数、任期を調査した結果、いわゆる伝統校とよばれる早稲田、慶應、明治は短期政権であり、2～4 年の幅で監督が変わっていた。しかし、ラグビー新興校である帝京、筑波は長期政権で監督はほとんど変わっていなかった。

第３項　スポーツ推薦内定時期

表 5　スポーツ推薦内定時期

	早稲田	帝京	慶應	明治	筑波
時期	11 月	6 月	12 月	6 月	9 月

各大学のスポーツ推薦内定の時期が大きく異なっていた。帝京、明治は 6 月であり、筑波は 9 月、早稲田、慶應は 11 月、12 月と最も遅かった。

第２節　　選手獲得分析

第１項　早稲田

1）部員輩出校

早稲田ラグビー部の部員輩出校は図１の通りであった。

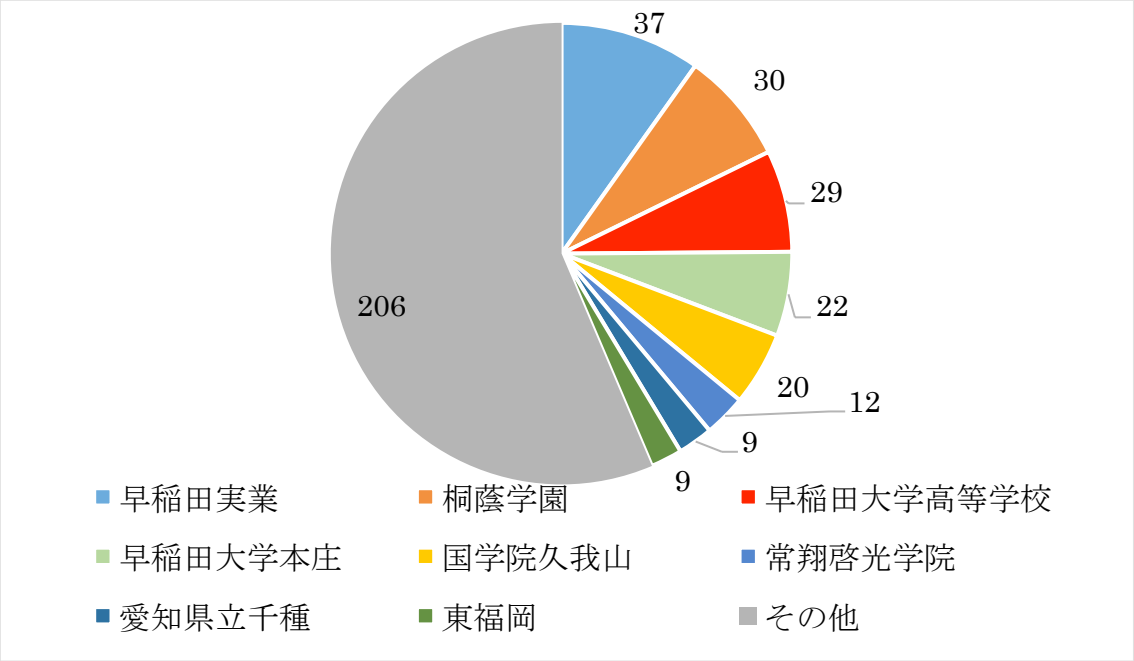


図　1　早稲田部員輩出校

最も輩出人数が多い高校は、早稲田実業学校（以下、早実とする）で、37 人となり、全体の 10%となった。次に桐蔭学園（以下、桐蔭とする）が 30 人で 8%、早稲田大学高等学院（以下、早大学院とする）が 29 人で 8%、早稲田大学本庄高等学院（以下、早大本庄とする）22 人で 6%、久我山 20 人で 5%、常翔啓光学園（以下、啓光とする）12 人で 3%、東福岡、愛知県立千種（以下、千種とする）それぞれ 9 人で 2%となった。8 校の合計輩出人数は、168 人となり、全体の 45%を占めていた。

2）戦力要員輩出校

戦力要員輩出校は図 2 の通りであった。

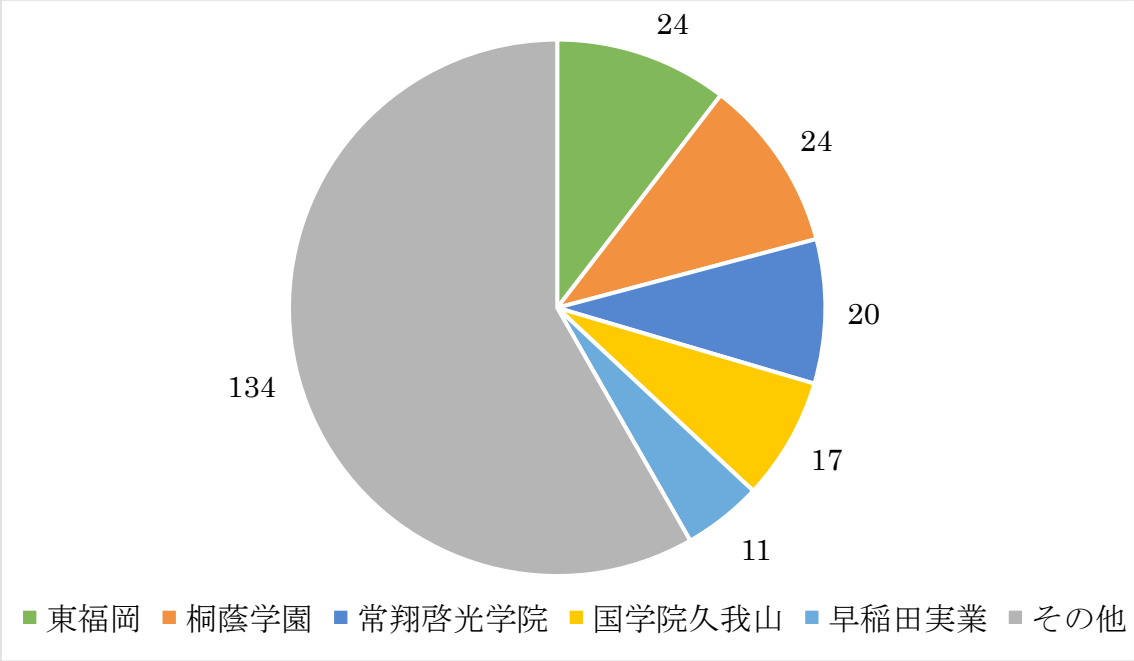


図 2　早稲田戦力要員輩出校

桐蔭と東福岡の輩出人数が最も多く 24 人、戦力要員総数の 10%を占めていた。次に、啓光が 20 人で全体の 9%、久我山 17 人で 7%、早実 11 人で 5%となった。戦力要員輩出校 5 校の合計人数は 96 人で全体の 42%であった。また、これら 5 校は、いずれも部員輩出校として抽出された高校であった。

早稲田ラグビー部の戦力輩出率が最も高い高校は東福岡で 267%、次に啓光 167%、千種 80%、久我山 80%、桐蔭 75%、早実 28%、早大学院 10%、早大本庄 4%となった。

3) 早稲田の部員輩出校と戦力要員輩出校の関連

早稲田の部員、戦力要員主要輩出校となった高校の全国大会実績をまとめたものが表 6 である。

表 6　早稲田調査結果まとめ

	出場回数	最高成績	部員輩出	戦力要員	輩出率
早実	0	0	37	11	28%
桐蔭学園	13	優勝	30	24	80%
國學院久我山	39	優勝	20	17	80%
早大学院	2	ベスト 16	29	3	10%
常翔啓光学園	19	優勝	12	20	167%
千種	0	0	9	8	80%
東福岡	25	優勝	9	24	267%

全体の傾向として、部員輩出校、戦力要員輩出校が全体に占める割合は 40%を超える結果となった。つまり、本研究によって抽出された高校から早稲田ラグビー部の一定数の部員を獲得していることが分かった。

4) 獲得した選手の概要

(1) ポジション

全部員のポジションを FW,BK にわけた場合は以下の図 3 になった。

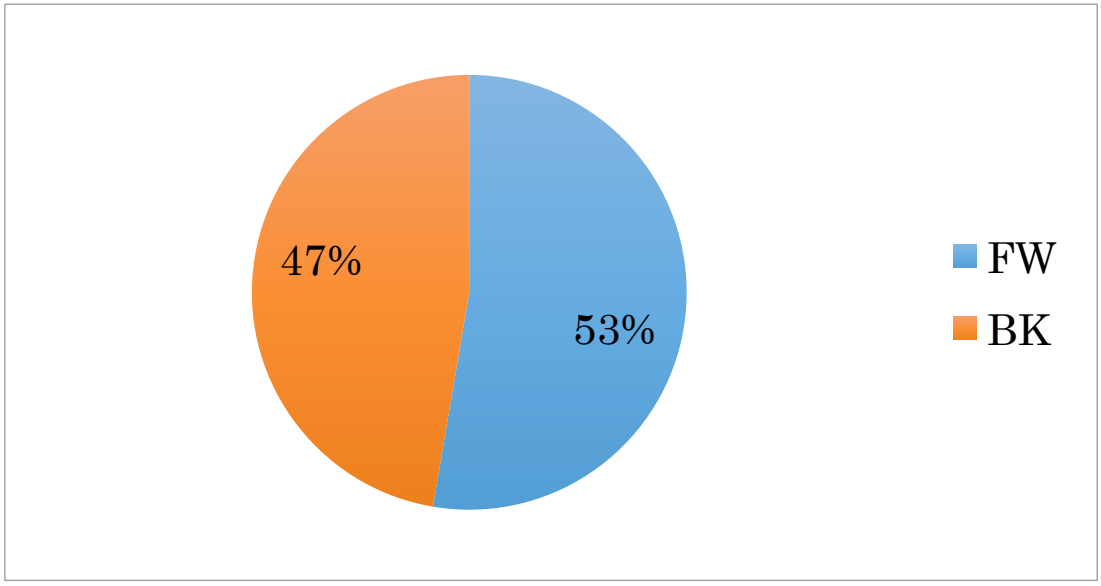


図 3　全部員 FW、BK 比率

FW が 53%、BK が 47%となった。

(2) ユース代表選手

図 4 から、早稲田大学は対象期間中、47 人のユース代表選手を獲得し、年平均約 3.6 人のユース代表選手を獲得していた。獲得したユース選手が在籍中に戦力要員として活躍していたかをまとめたのが図 5 である。2007 年から 2012 年にかけて、10 人以上のユース代表選手が戦力要員になっていた。特に 2009 年は 15 人のユース代表選手が戦力要員になっており、在籍するユース代表選手で 62.5%が占められていた。

獲得したユース選手の 61.5%が在籍中に戦力要員となっていた。また対象期間を前半 5 年、後半 5 年でみると、それぞれ 63.1%、59.9%であった。

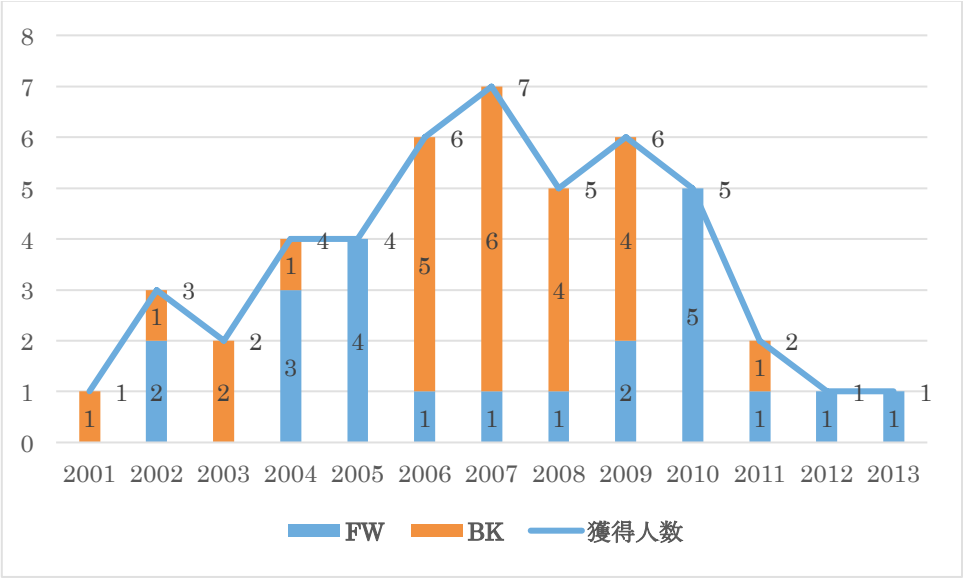


図 4　年度別ユース代表選手獲得人数（早稲田）

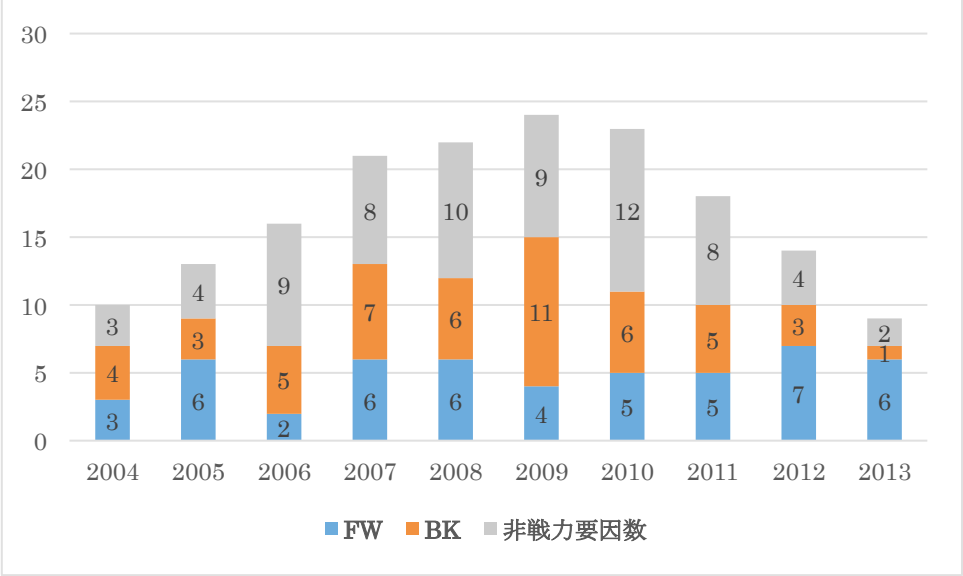


図 5　ユース代表選手が戦力要員に占める人数（早稲田）

第 1 項　帝京

1）部員輩出校

帝京ラグビー部の部員輩出校は図 6 の通りであった。

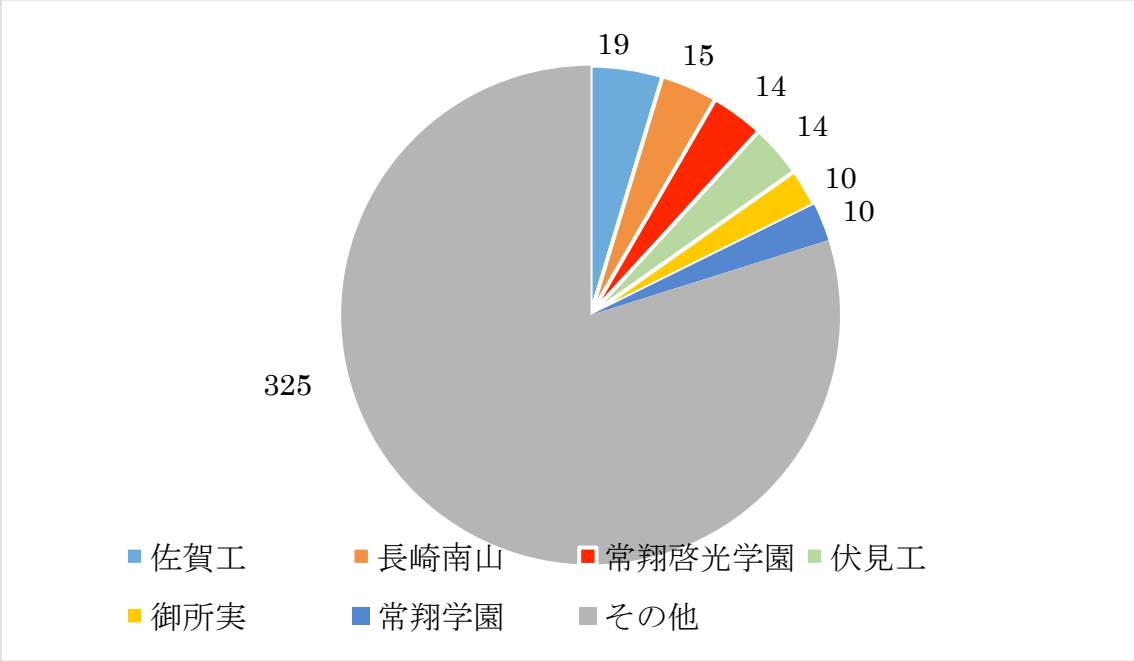


図 6　帝京部員輩出校

最も輩出人数が多い高校は、佐賀工業高校で(以下、佐賀工とする)で、19 人となり、全体の 5%となった。次に長崎南山高校(以下、長崎南山とする)が 15 人で 4%、伏見工と啓光が 14 人で 3%、御所実業高校(以下、御所実とする)と常翔学園が 10 人で 2%となった。6 校の合計輩出人数は 82 人となり、全体の 20%を占めていた。

2) 戦力要員輩出校

戦力要員輩出校は図 7 の通りであった。

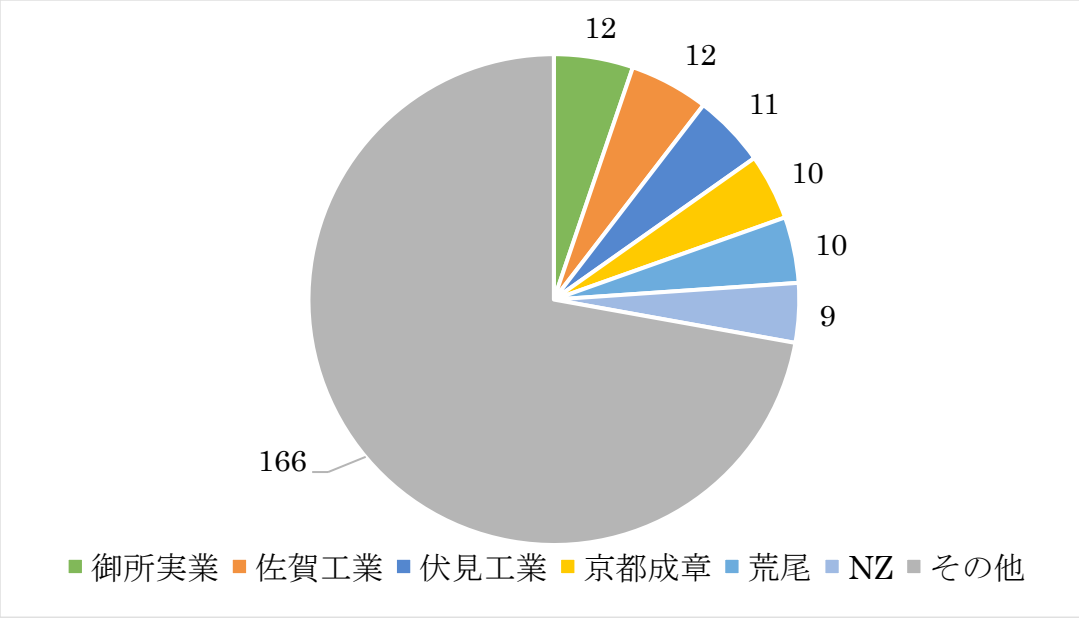


図 7　帝京戦力要員輩出校

御所実と佐賀工の輩出人数が最も多く 12 人、戦力要員総数のそれぞれ 5%を占めていた。次に伏見工が 11 人で 5%、京都成章高校(以下、京都成章とする)と熊本県立荒尾高校(以下、荒尾とする)がそれぞれ 10 人で 4%となった。戦力要員輩出校 5 校の合計人数は 55 人で全体の 24%であった。またこれら 5 校のうち、御所実、佐賀工、伏見工の 3 校は部員輩出校として抽出された高校であった。

3) 帝京の部員輩出校と戦力要員輩出校の関連

帝京の部員、戦力要員主要輩出校となった高校の全国大会実績をまとめたものが表 7 である。

表 7　帝京ラグビー部調査結果まとめ

	出場回数	最高成績	部員輩出	戦力要員	輩出率
御所実業	9	準優勝	10	12	120%
伏見工業	19	優勝	14	11	79%
佐賀工業	43	準優勝	19	12	63%
荒尾	7	2 回戦	9	10	111%
京都成章	7	ベスト 4	9	10	111%
長崎南山	3	ベスト 8	15	7	47%
鹿児島実業	15	2 回戦	3	7	233%

全体の傾向として、部員輩出校、戦力要員輩出校が全体に占める割合は 19%をとなった。

つまり、本研究によって抽出された高校だけでなく他の多くの高校から帝京ラグビー部は部員を獲得していることが分かった。

4) 獲得した選手の概要

(1) ポジション

全部員のポジションを FW,BK にわけた場合は以下の通りになった。

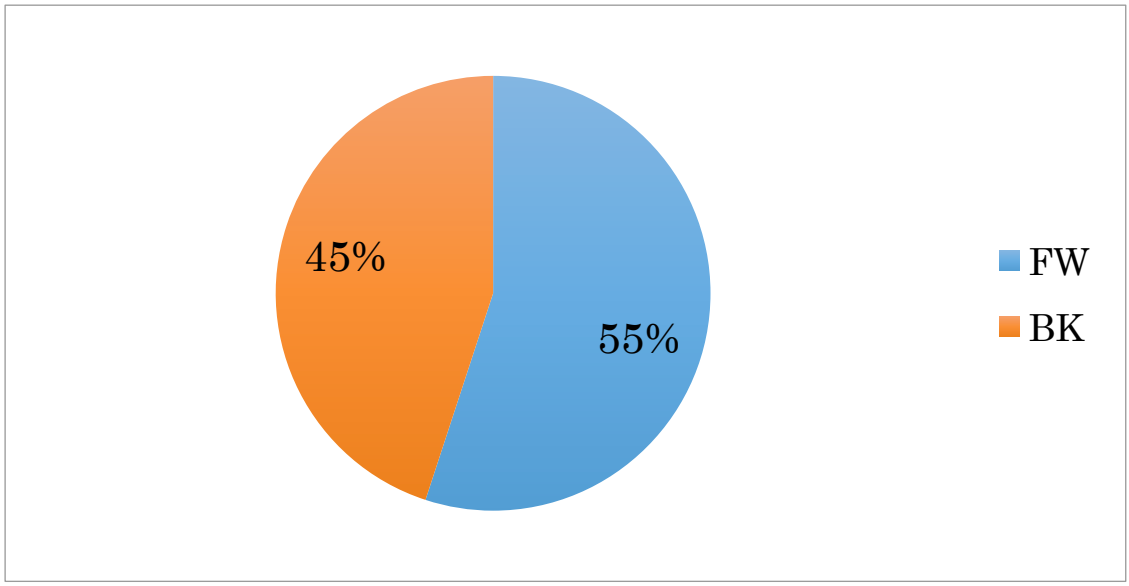


図 8　全部員 FW、BK 比率

FW が 55%、BK が 45%となった。

(2) ユース代表選手

図 9 から、帝京は対象期間中、24 人のユース代表選手を獲得し、年平均約 1.8 人のユース代表選手を獲得していた。獲得したユース選手が在籍中に戦力要員として活躍していたかをまとめたのが図 10 である。2008 年から 2010 年にかけて、5 人以上のユース代表選手が戦力要員になっており、2013 年には 9 人のユース代表選手が戦力要員になっていた。特に 2013 年は 9 人のユース代表選手が戦力要員になっており、在籍するユース代表選手の 75%がユース代表選手で占められていた。

獲得したユース選手の 49%が在籍中に戦力要員となっていた。また対象期間を前半 5 年、後半 5 年でみると、それぞれ 52%、47%であった。

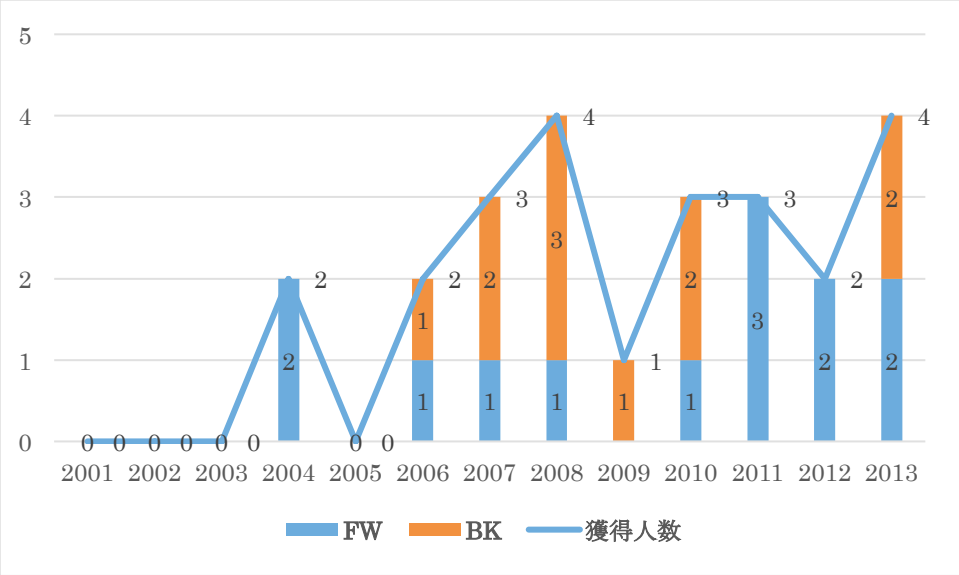


図 9　年度別ユース代表選手獲得人数（帝京）

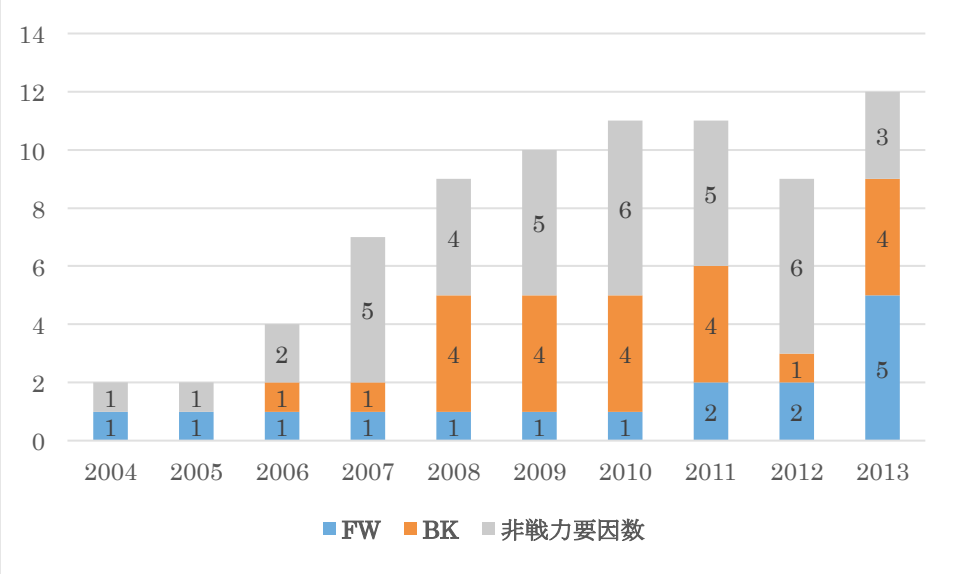


図 10　ユース代表選手が戦力要員に占める人数（帝京）

第２項　慶應

1) 部員輩出高

慶應蹴球部の部員輩出校は図 11 の通りであった。

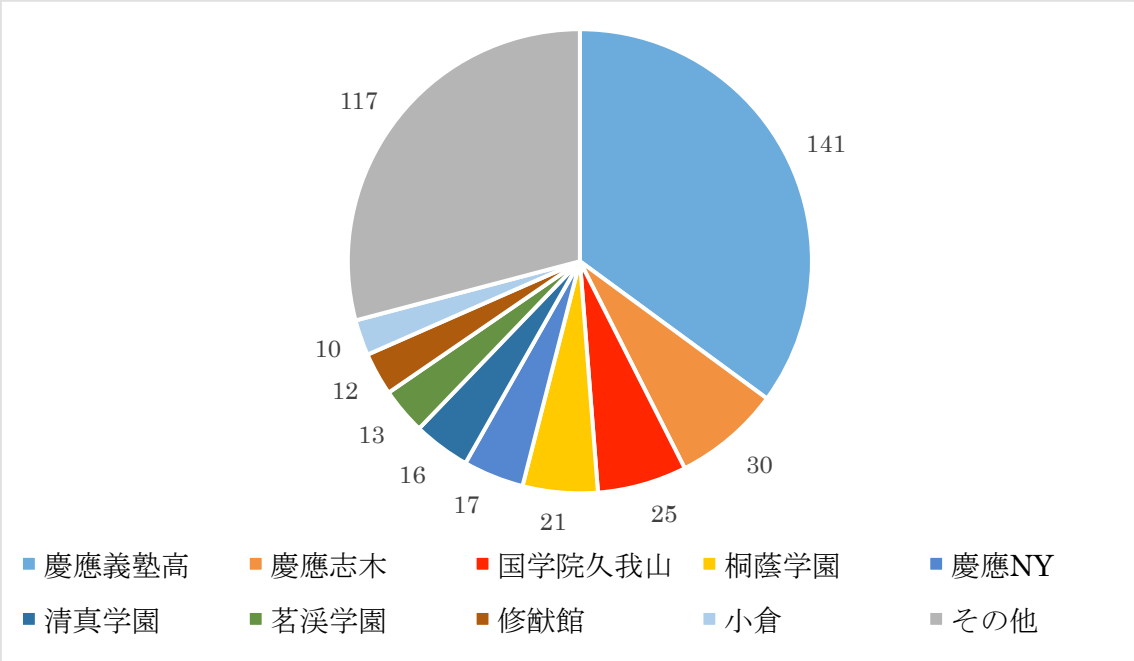


図　11　慶應部員輩出校

最も輩出人数が多い高校は、慶應義塾高校(以下、慶應義塾とする)で、141 人となり、全体の 35%となった。次に慶應義塾志木高校(以下、慶應志木とする)が 30 人で 7%、久我山が 25 人で 6%、桐蔭が 21 人で 5%、慶應義塾 NY 高校(以下、慶應 NY とする)が 17 人で 4%、清真学園(以下、清真とする)が 16 人で 4%、茗渓学園(以下、茗渓とする)が 13 人で 3%、福岡県立修猷館高校(以下、修猷館とする)が 12 人で 3%、福岡県立小倉高校(以下、小倉とする)が 10 人で 2%となった。9 校の合計輩出人数は 285 人となり、全体の 71%を占めていた。

2) 戦力要員輩出校

戦力要員輩出校は図 12 の通りであった。

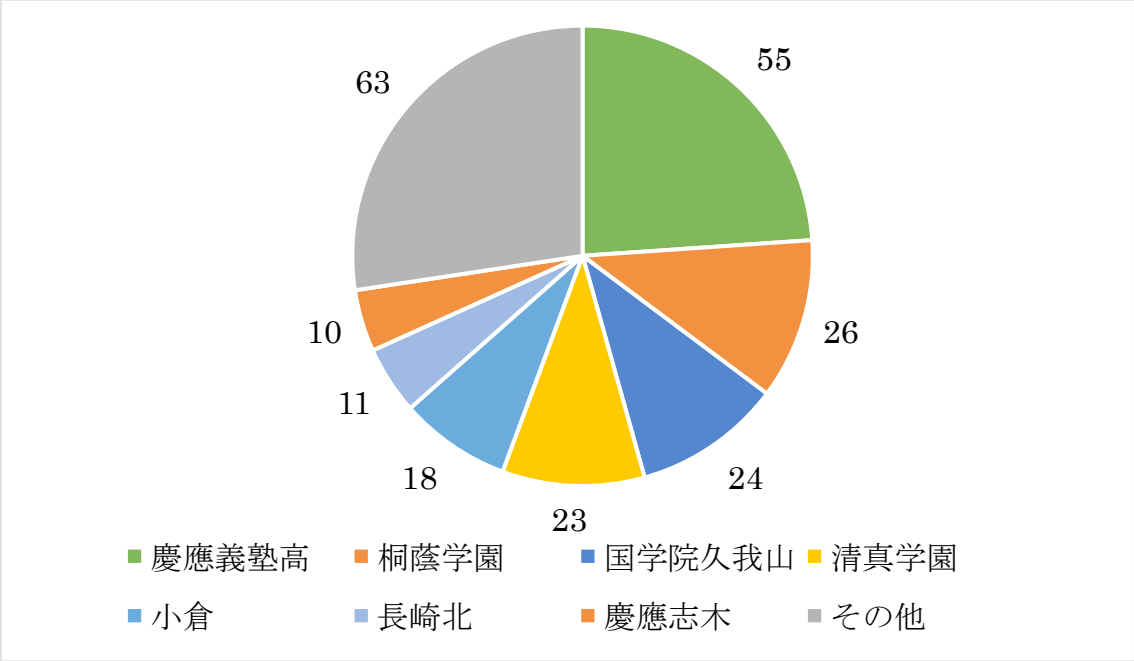


図 12　慶應戦力要員輩出校

慶應義塾高校が最も多く 55 人、戦力要員総数の 24%を占めていた。次に桐蔭が 26 人で全体の 11%、次が久我山 24 人で 10%、小倉 18 人で 8%、清真、長崎県立長崎北高校(以下、長崎北とする)ともに 11 人で 5%、慶應志木が 10 人で 4%となった。またこれら 7 校のうち長崎北を除く 6 校は部員輩出校として抽出された高校であった。

3) 慶應の部員輩出校と戦力要員輩出校の関連

慶應の部員、戦力要員主要輩出校となった高校の全国大会実績をまとめたものが表 8 である。

表 8　慶應調査結果まとめ

	出場回数	最高成績	部員輩出	戦力要員	輩出率
慶應義塾	34	優勝	141	55	39%
桐蔭学園	13	優勝	21	26	123%
國學院久我山	39	優勝	25	24	96%
慶應志木	0		30	10	33%
小倉	0		10	18	180%
清真学園	8	ベスト 8	16	11	69%
長崎北	8	ベスト 4	5	11	220%

慶應蹴球部の戦力要員輩出率が最も高い高校は長崎北で 220%、次に小倉 180%、桐蔭

123%、久我山 96%、清真 69%、慶應義塾 39%、慶應志木 33%となった。

全体の傾向として、部員輩出校、戦力要員輩出校が全体に占める割合は 74%をとなった。つまり、本研究によって抽出された高校から慶應ラグビー部は大部分の部員を獲得していることが分かる。

4) 獲得した選手の概要

(1) ポジション

全部員のポジションを FW,BK にわけた場合は以下の通りになった。

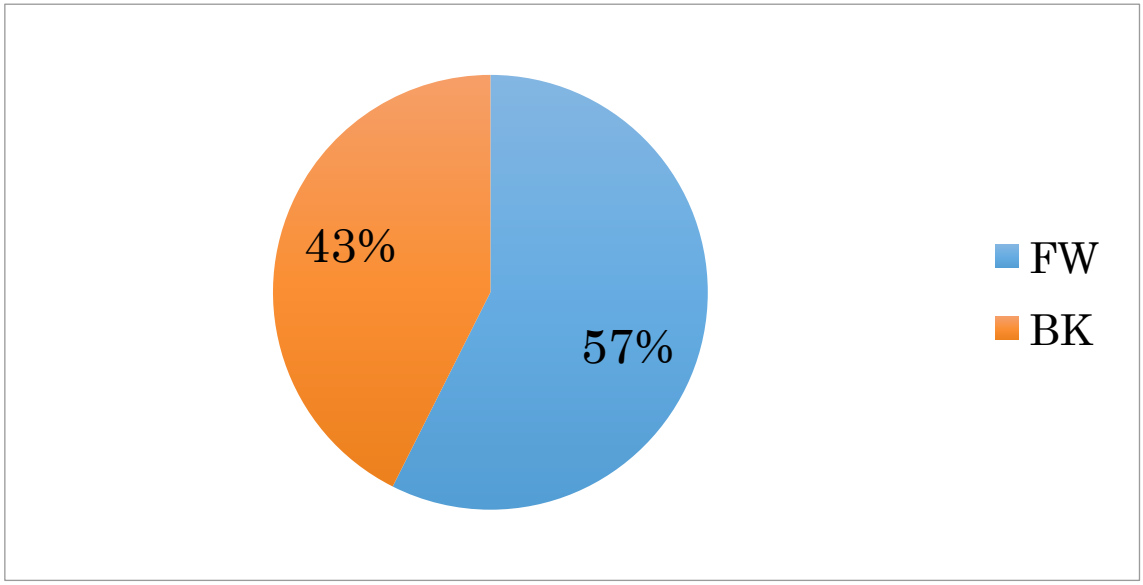


図 13　全部員 FW、BK 比率

FW が 57%、BK が 43%となった。

(2) ユース代表選手

図 14 から、慶應は対象期間中、21 人のユース代表選手を獲得し、年平均約 1.6 人のユース代表選手を獲得していた。獲得したユース選手が在籍中に戦力要員として活躍していたかをまとめたのが図 15 である。2005 年、2008 年、2010 年は、7 人のユース代表選手が戦力要員になっており、特に 2005 年は在籍するユース代表選手の 100%がユース代表選手で占められていた。

獲得したユース選手の 60%が在籍中に戦力要員となっていた。また対象期間を前半 5 年、後半 5 年でみると、それぞれ 44%、73%であった。

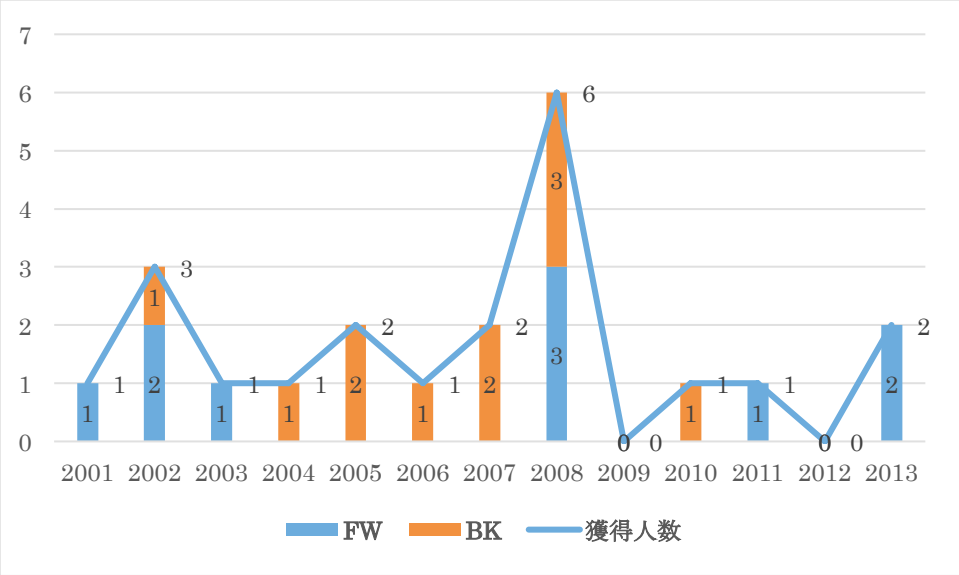


図 14　年度別ユース代表選手獲得人数（慶應）

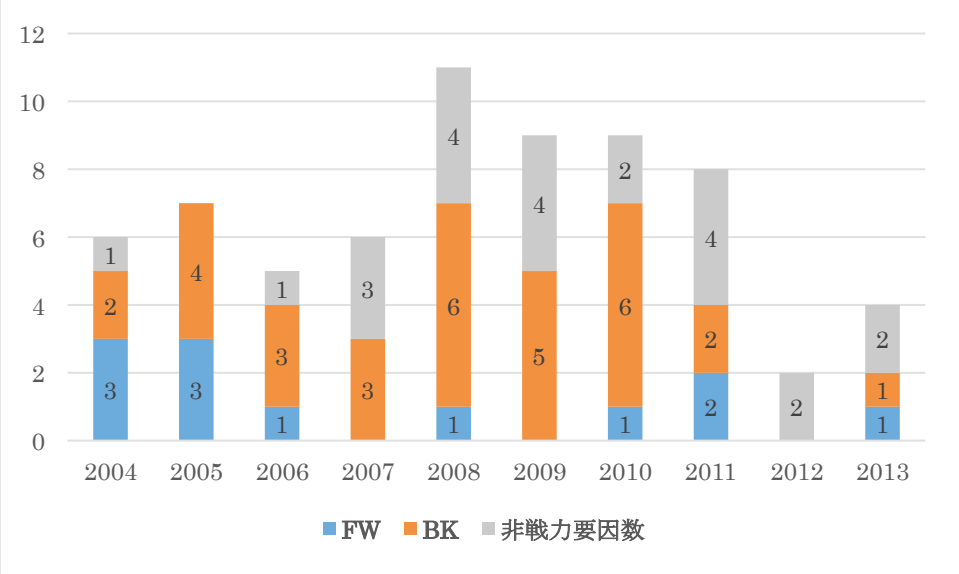


図 15　ユース代表選手が戦力要員に占める人数（慶應）

第３項　明治

1) 部員輩出校

明治ラグビー部の部員輩出校は図 16 の通りであった。

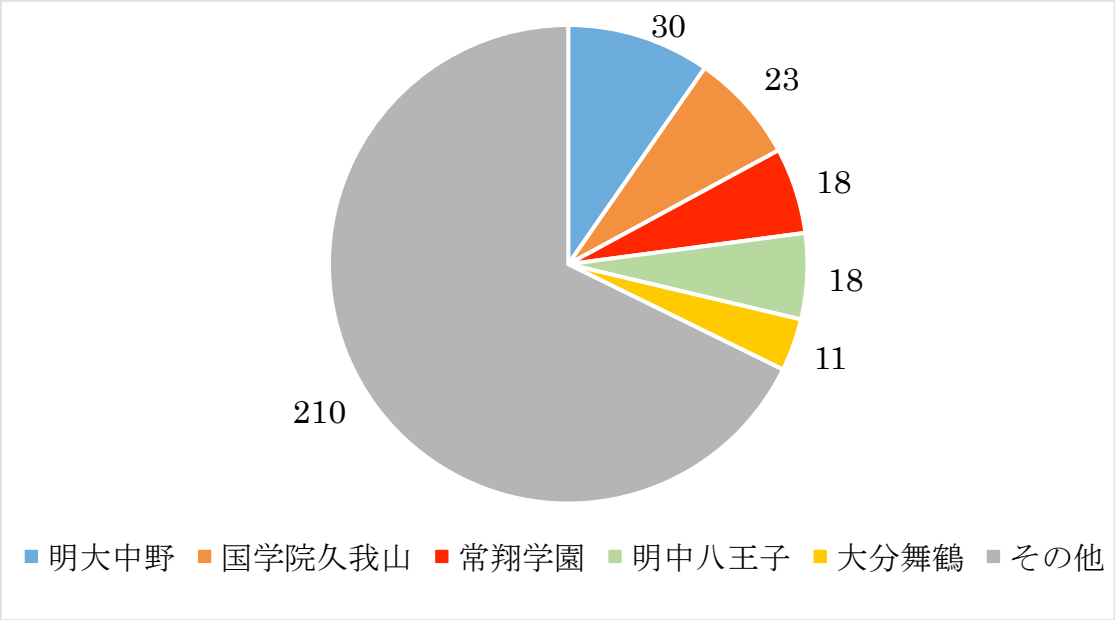


図　16　明治部員輩出校

最も輩出人数が多いのは、明治附属中野高校(以下、明大中野とする)で、30 人となり、全体の 10%となった。次に久我山が 23 人で 7%、常翔学園と明治附属中野八王子高校(以下、明中八王子とする)がそれぞれ 18 人で 6%、大分県立舞鶴高校(以下、大分舞鶴とする)が 11 人で 4%となった。5 校の合計輩出人数は 100 人となり、全体の 32%を占めていた。

2) 戦力要員輩出校

戦力要員輩出校は図 17 の通りであった。

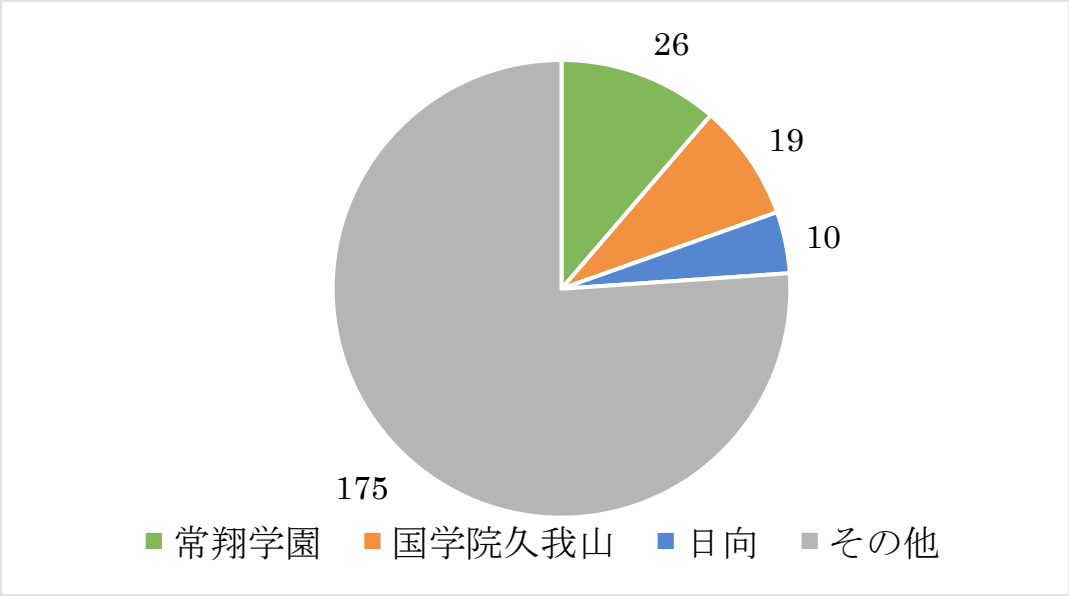


図 17　明治戦力要員輩出校

常翔学園が最も多く 26 人で、戦力要員総数の 11%を占め、次に久我山 19 人で 8%、日向 10 人で 4%となった。またこれら 3 校のうち、日向を除く 2 校は部員輩出校として抽出された高校であった。

3) 明治の部員輩出校と戦力要員輩出校の関連

明治の部員、戦力要員主要輩出校となった高校の全国大会実績をまとめたものが表 9 である。

表 9　明治調査結果まとめ

	出場回数	最高成績	部員輩出	戦力要員	輩出率
明大中野	1	ベスト 16	30	2	7%
常翔学園	33	優勝	18	26	144%
國學院久我山	38	優勝	23	19	83%
明中八王子	0		18	5	28%
大分鶴舞	54	優勝	11	8	73%
日向	1	2 回戦	5	10	200%

明治ラグビー部の戦力要員輩出率が最も高い高校は日向で 200%、次に常翔学園 144%、久我山 83%、大分舞鶴 73%、明大中野八王子 28%、明大中野 7%となった。

全体の傾向として、部員輩出校、戦力要員輩出校が全体に占める割合は 23%をとなった。つまり、本研究によって抽出された高校だけでなく他の多くの高校から明治ラグビー部は

部員を獲得していることが分かった。

4) 獲得した選手の概要

(1) ポジション

全部員のポジションを FW,BK にわけた場合は以下の通りになった。

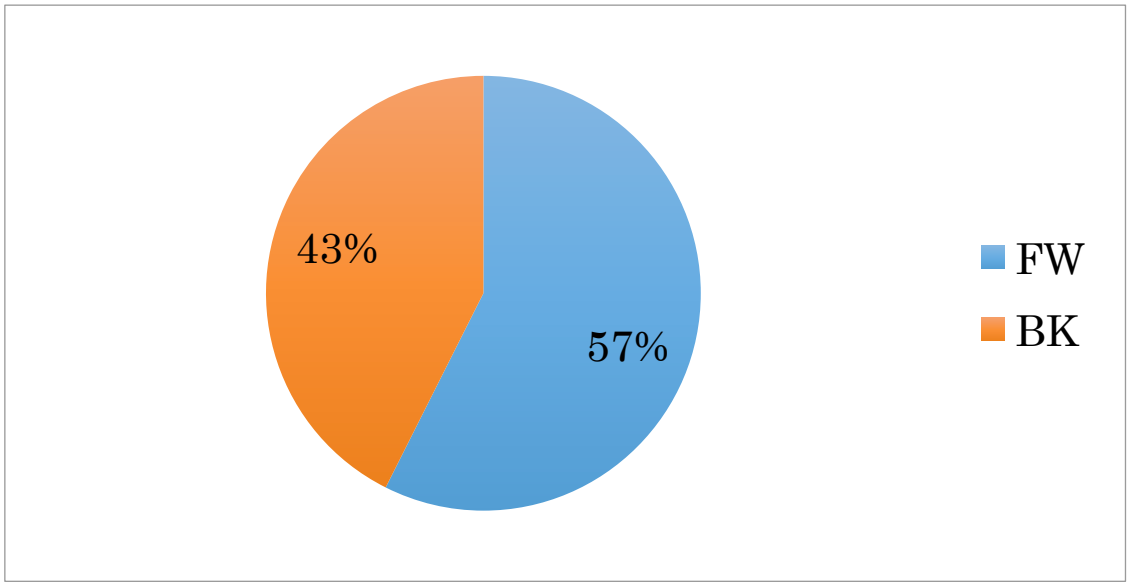


図 18　全部員 FW、BK 比率

FW が 57%、BK が 43%となった。

(2) ユース代表選手

図 19 から、明治は対象期間中、44 人のユース代表選手を獲得し、年平均約 3.4 人のユース代表選手を獲得していた。獲得したユース選手が在籍中に戦力要員として活躍していたかをまとめたのが図 20 である。2012 年から 2013 年にかけて、10 人のユース代表選手が戦力要員になっており、それぞれの年で在籍するユース代表選手の 59%、67%がユース代表選手で占められていた。

獲得したユース選手の 50%が在籍中に戦力要員となっていた。また対象期間を前半 5 年、後半 5 年でみると、それぞれ 60%、42%であった。

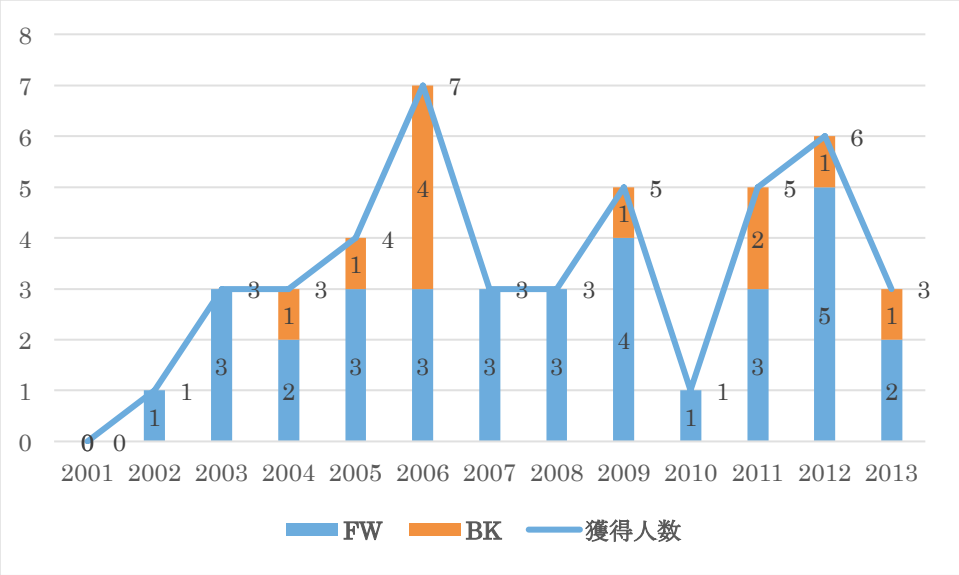


図 19　年度別ユース代表選手獲得人数（明治）

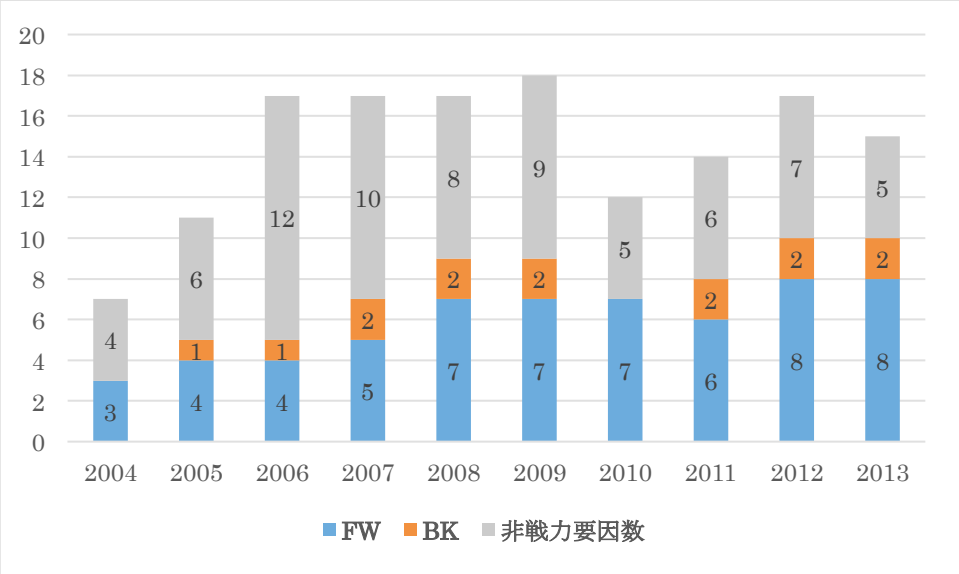


図 20　ユース代表選手が戦力要員に占める人数（明治）

第４項　筑波

1) 部員輩出校

筑波ラグビー部の部員輩出校は図 21 の通りであった。

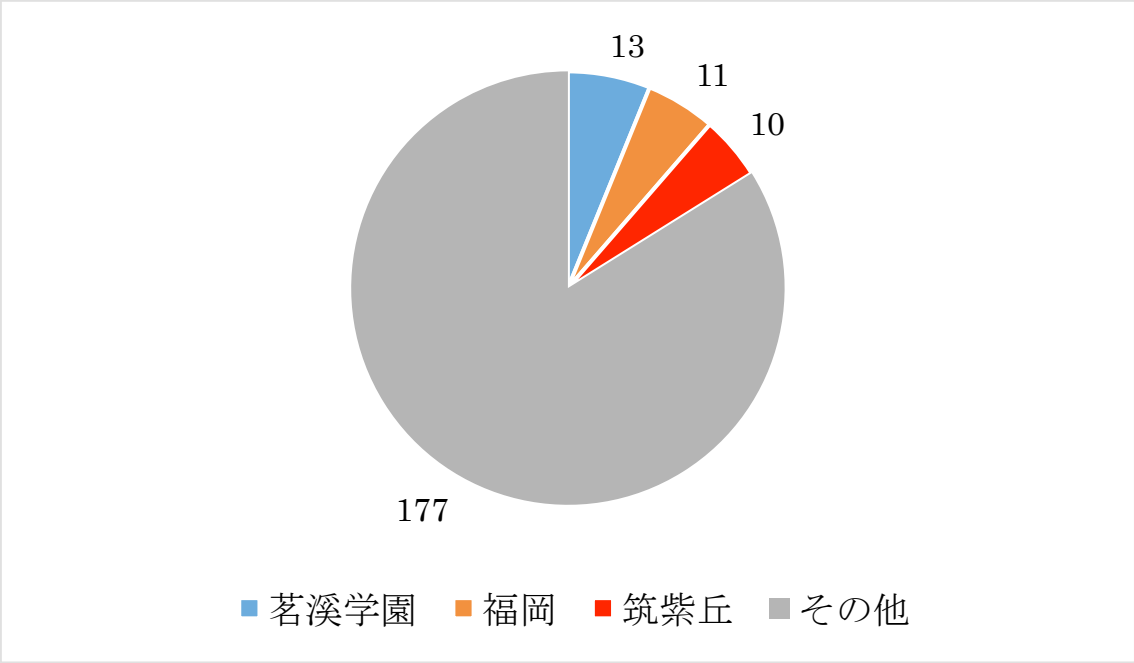


図 21　筑波部員輩出校

最も輩出人数が多いのは、茗溪学園で、13 人となり、全体の 6%となった。次に福岡県立福岡高校(以下、福岡とする)で、11 人となり、全体の 5%となった。次に福岡県立筑紫丘高等学校（以下、筑紫丘とする）が 10 人で 5%となった。3 校の合計輩出人数は 34 人となり、全体の 16%を占めていた。

2) 戦力要員輩出校

戦力要員輩出校は図 22 の通りであった。

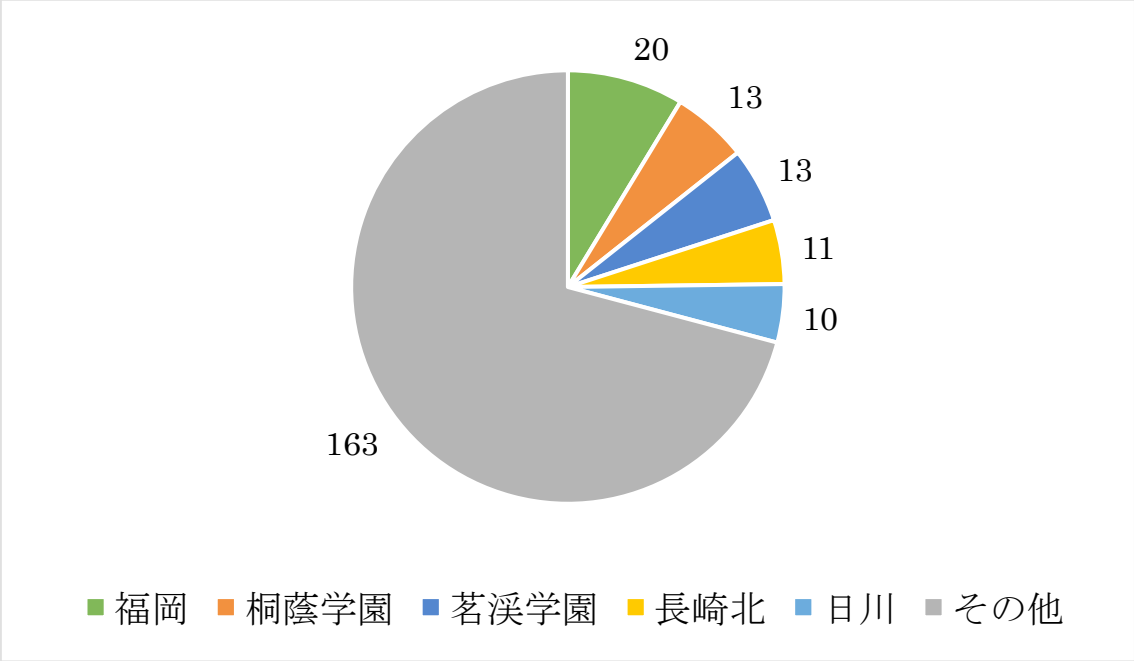


図 22　筑波戦力要員輩出校

福岡が最も多く 20 人、戦力要員総数の 9%を占めていた。次に桐蔭、茗渓がともに 13 人で全体の 5%、長崎北が 11 人で 5%、日川 10 人で 4%となった。またこれら 5 校のうち、福岡と茗渓学園の 2 校は部員輩出校として抽出された高校であった。

3) 筑波の部員輩出校と戦力要員輩出校の関連

筑波の部員、戦力要員主要輩出校となった高校の全国大会実績をまとめたものが表 10 である。

表 10　筑波調査結果まとめ

	出場回数	最高成績	部員輩出	戦力要員	輩出率
福岡高校	37	優勝	11	20	181%
桐蔭学園	13	優勝	6	13	217%
茗渓学園	20	優勝	10	13	130%
長崎北	8	ベスト 4	4	11	275%
日川	44	ベスト 4	5	10	200%

筑波大学ラグビー部の戦力要員輩出率が最も高い高校は長崎北で 275%、次に桐蔭 217%、日川 200%、福岡 181%、茗渓 130%となった。

全体の傾向として、部員輩出校、戦力要員輩出校が全体に占める割合は 30%をとなった。つまり、本研究によって抽出された高校だけでなく他の多くの高校から筑波ラグビー部は部員を獲得していることが分かった。

4) 獲得した選手の概要

(1) ポジション

全部員のポジションを FW,BK にわけた場合は以下の通りになった。

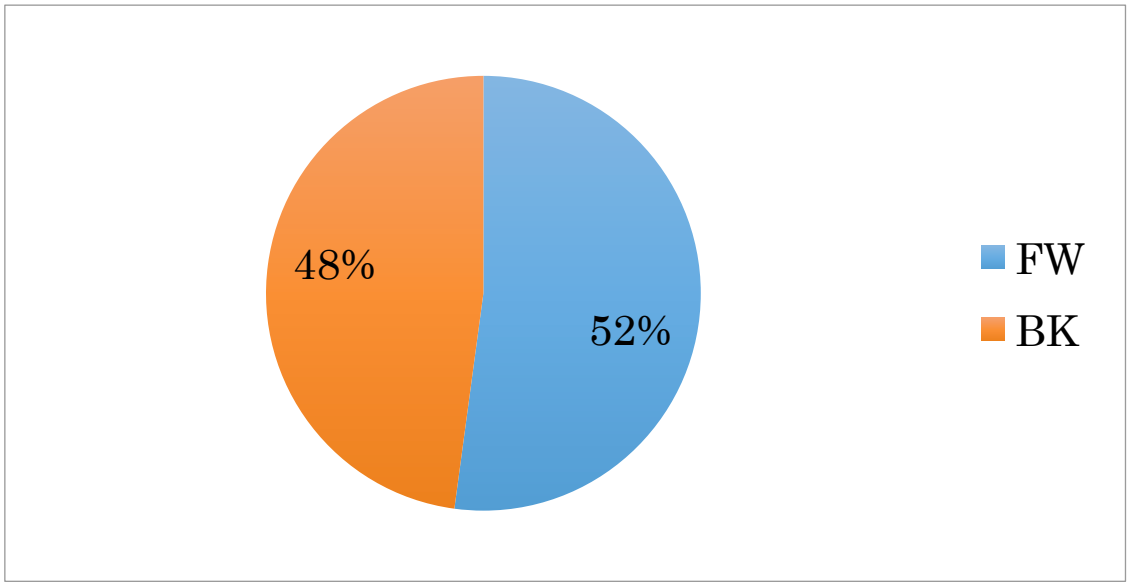


図 23　全部員 FW、BK 比率

FW が 52%、BK が 48%となった。

(2) ユース代表選手

図 24 から、筑波は対象期間中、12 人のユース代表選手を獲得し、年平均約 0.9 人のユース代表選手を獲得していた。獲得したユース選手が在籍中に戦力要員として活躍していたかをまとめたのが図 25 である。2010 年から 2013 年にかけて、4 人以上のユース代表選手が戦力要員になっていた。特に 2013 年は 6 人のユース代表選手が戦力要員になっており、在籍するユース代表選手の 100%がユース代表選手で占められていた。

獲得したユース選手の 58%が在籍中に戦力要員となっていた。また対象期間を前半 5 年、後半 5 年でみると、それぞれ 77%、43%であった。

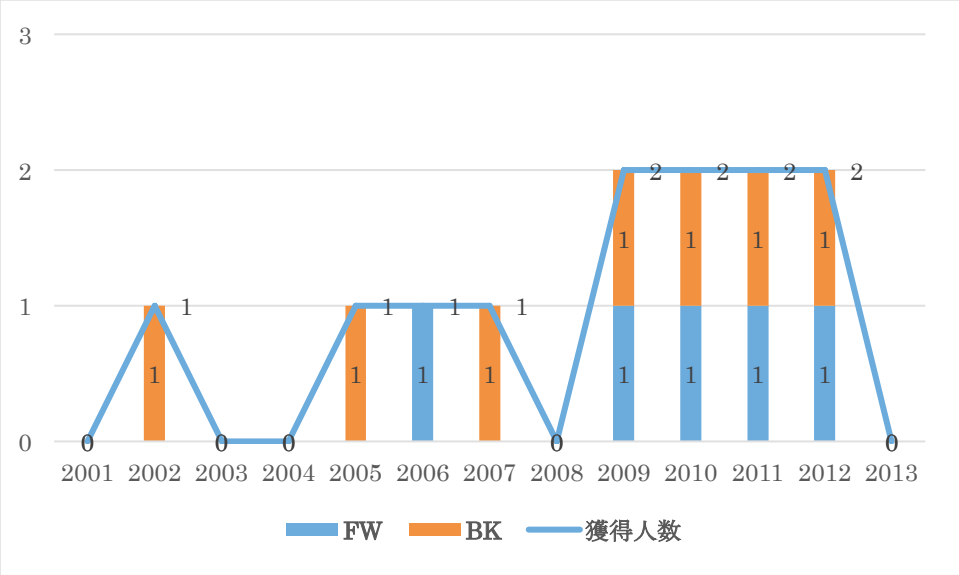


図 24　年度別ユース代表選手獲得人数（筑波）

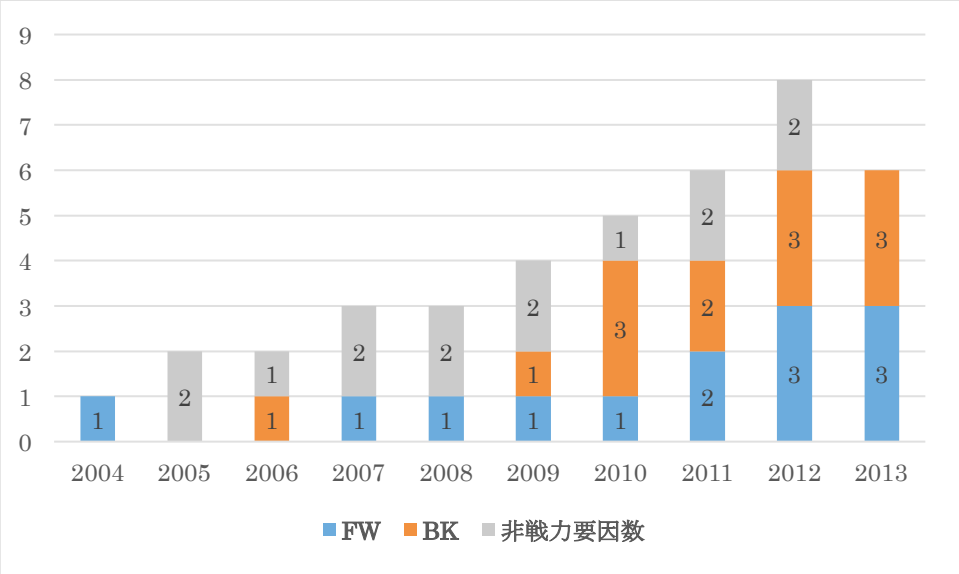


図 25　ユース代表選手が戦力要員に占める人数（筑波）

第５項　５大学の FW・BK における獲得数経年変化

5 大学の FW、BK における対象期間内の獲得数の推移を以下の図 26・27 に示す。FW の獲得数の経年変化を比較したところ、大学間で差があった。(F(4,48)=12.768, p<.01)多重比較によれば、「筑波」とそれ以外の 4 大学(筑波と帝京・早稲田・慶應：p<.01、筑波と明治：p<.05)において、また、「帝京」と「明治」(p<.05)において有意差があった。

BK の獲得数の経年変化を比較したところ、BK でも同様に大学間に差があった。(F(4,48)=12.967, p<.01)多重比較によれば、「筑波」とそれ以外の 4 大学(筑波と帝京・早稲田・慶應：p<.01、筑波と明治：p<.05)において、また、「明治」と「慶應」(p<.05)において有意差があった。

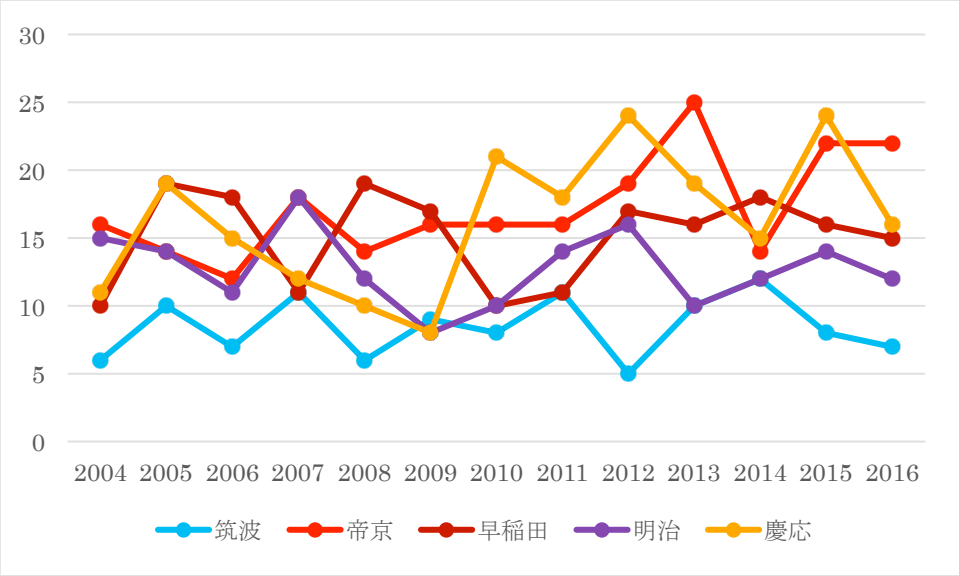


図 26　FW 獲得数経年変化

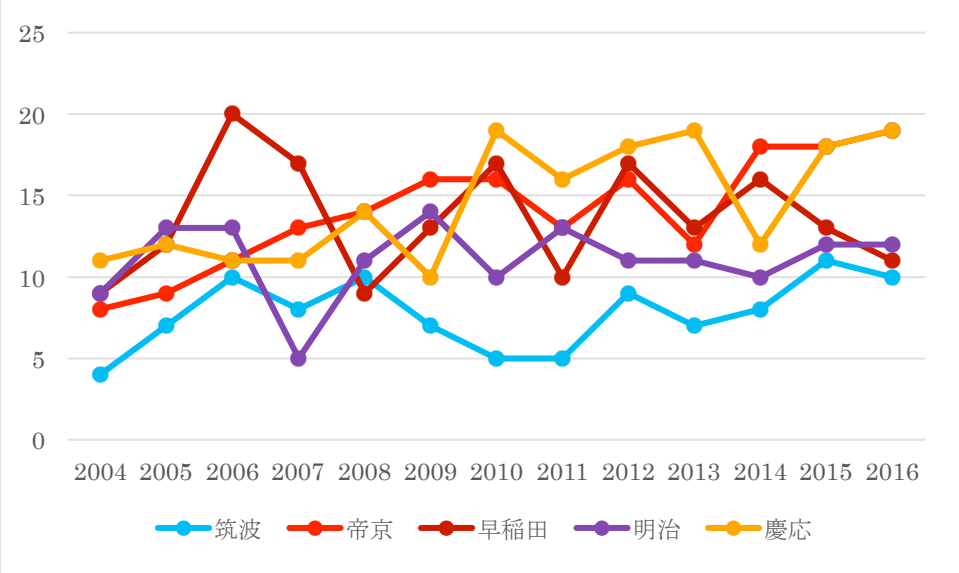


図 27　BK 獲得数経年変化

第３節　ユース代表選手獲得分析

第１項　各大学合計獲得人数及び経年比較

2001 年から 2013 年の大学別ユース代表選手の獲得人数を調査した。図 28 は合計獲得人数であり、図 29 は経年でみた獲得人数である。

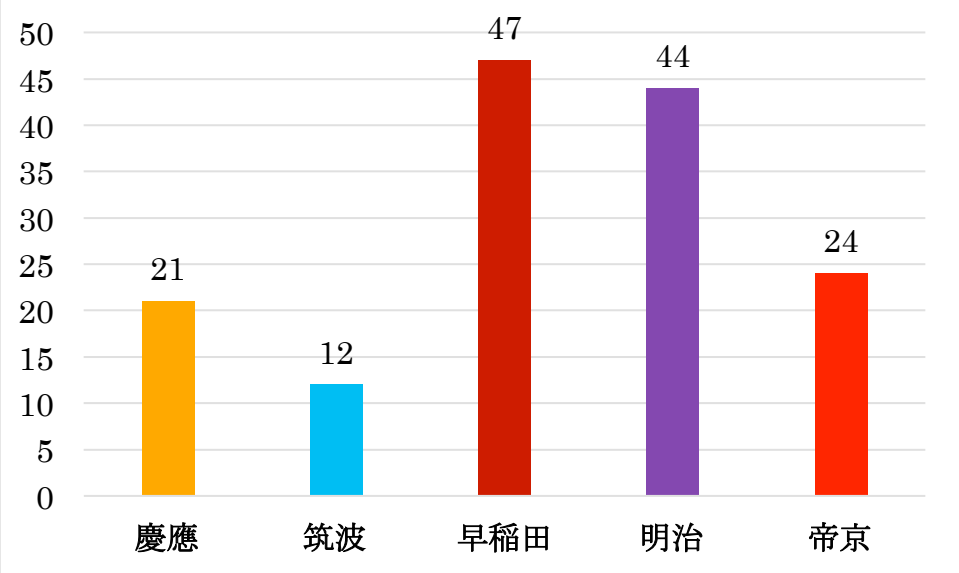


図 28　大学別ユース代表選手合計獲得人数

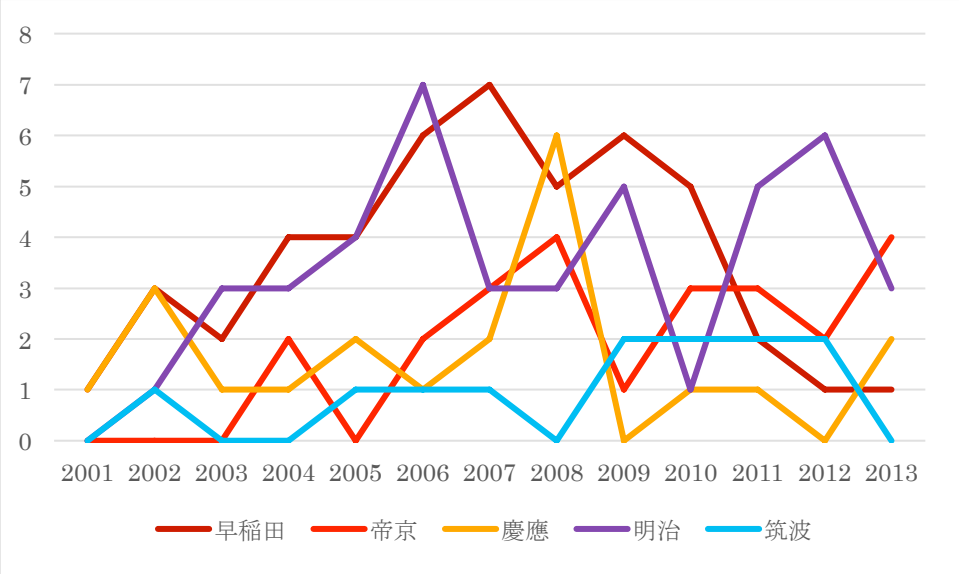


図 29　年度別ユース代表選手獲得人数

ユース代表選手の獲得人数に関しては早稲田の 47 人が最多で、次に明治の 44 人と続き、この 2 大学が他の大学を獲得人数においては大きく引き離す結果となった。帝京は 3 番目に多い 24 人であり、慶應大学が 21 人、筑波大は 12 人に留まるという結果となった。

次に 5 大学の 4 年間のユース代表選手所属人数の推移を調査した結果が図 30 である。

ユース代表選手獲得数を比較したところ、大学間で有意差が見られた。(F(4,60)=6.549、p<.01)

多重比較によれば、「慶應」と「早稲田」(p<.05)、「筑波」と「早稲田」(p<.01)、「筑波」と「明治」(p<.01)において有意差があった。

第２項　各大学の年度に有するユース代表数と戦力要員

各大学がそれぞれの年度で 1～4 年生にユース代表を有していた人数は図 30 の通りで、大学間に差があった（F(4)=2.63, p=0.000）

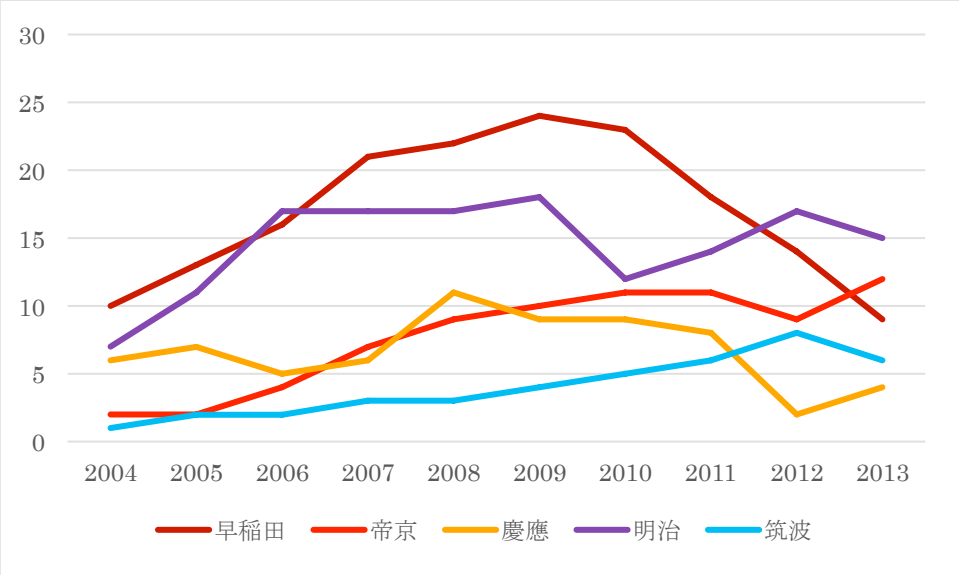


図 30　大学別ユース代表選手所属人数の推移

早稲田はユース代表選手所属人数が多く、2009 年には 4 学年で 24 人のユース代表選手が所属していた。しかし、その後、ユース代表選手所属人数は年々減少し、2013 年には 4 学年で 9 人のユース代表選手が所属した。

帝京は 2004 年のユース代表選手所属人数は 4 学年で 2 人であったが、その後上昇を続け、2013 年には 4 学年で 12 人のユース代表選手が所属していることが分かった。

慶應は 2008 年に 4 学年で 11 人のユース代表選手が所属していたが、2012 年には 4 学年で 2 人のユース代表選手が所属し、5 大学で最も少なかった。

明治は早稲田と同様、ユース代表選手を積極的に獲得していることが分かった。2010 年には、一時的にユース代表選手の所属人数が減少したが、2012 年には 4 学年で 17 人のユ

ース代表選手が所属しており、5 大学で最も多い人数であった。

筑波は 2004 年のユース代表選手所属人数は 4 学年で 1 人であったが、その後緩やかな上昇を続け、2012 年には 4 学年で 8 人のユース代表選手が所属していた。

第 3 項　前期(2000～2006 年)、後期(2007～2012 年)間獲得人数比較

調査期間を前後期に分け獲得人数を調査した結果が図 31 である。

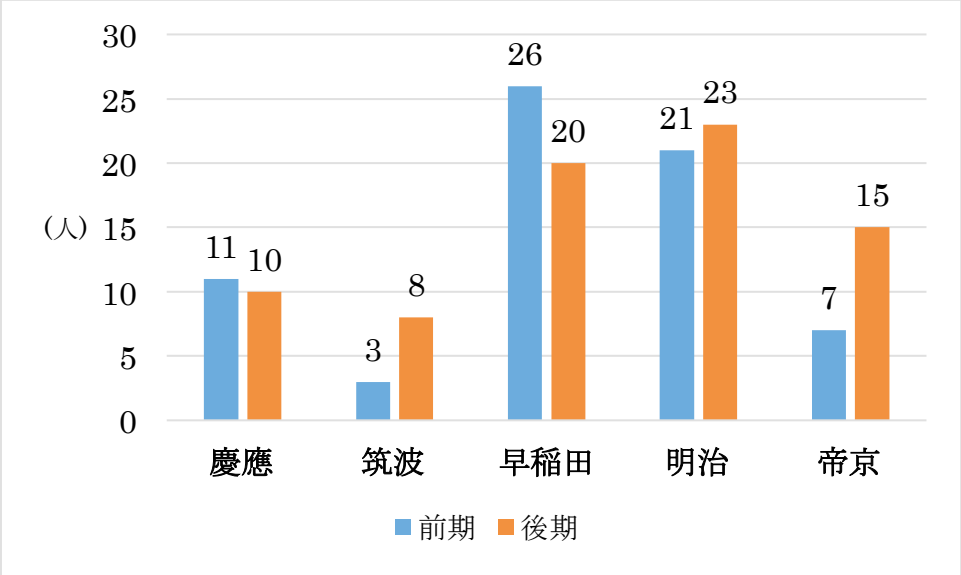
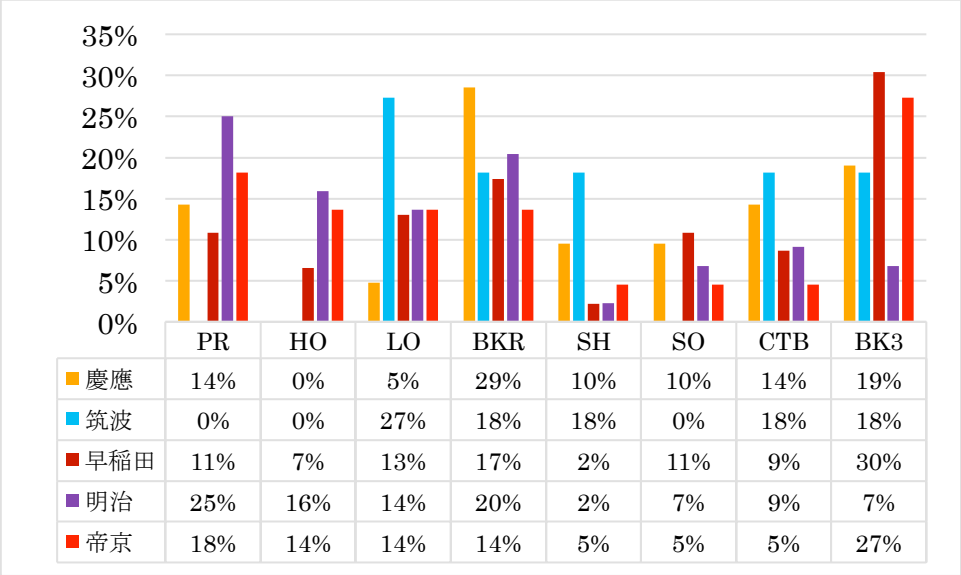


図　31　前後期別獲得人数調査結果

調査期間を前期、後期に 2 分割した結果、早稲田は前期に比べ後期では獲得人数が大きく減少していることが判明した。また、慶應大学と明治は両期間で獲得人数がほとんど変わらず、筑波と帝京は前期に比べ後期では獲得人数を大きく伸ばしていることがわかった。

第 4 項　ポジション別獲得割合

次に大学毎のポジション別獲得割合に関する調査を行った。調査結果は図 32 の通りである。



	PR	HO	LO	BKR	SH	SO	CTB	BK3
慶應	14%	0%	5%	29%	10%	10%	14%	19%
筑波	0%	0%	27%	18%	18%	0%	18%	18%
早稲田	11%	7%	13%	17%	2%	11%	9%	30%
明治	25%	16%	14%	20%	2%	7%	9%	7%
帝京	18%	14%	14%	14%	5%	5%	5%	27%

図 32　ポジション別獲得割合

ポジション別獲得割合を調査した結果、大学毎で傾向の違いがみられた。慶應大学は全体の約 3 割 BKR の選手であり、次に多いのが BK3 で 19%を占めた。一方で LO は 5%に留まり HO に関しては 1 人も獲得していないということが明らかになった。
筑波は LO の選手が獲得選手全体の 27%を占めたが、反対に PR、HO、SO に関しては 1 人の選手も獲得していないという結果になった。

早稲田は獲得選手数が多いこともありすべてのポジションの選手を獲得してきているが、BK3 の選手が全体の 3 割を占めており、この割合は全大学全ポジションの中で最も高い数値となった。CTB、HO、SH に関しては比率が 10%以下であり、特に SH は 2%に留まる結果となった。

明治も早稲田と同様すべてのポジションの選手を獲得していた。中でも PR と BKR がそれぞれ 25%、20%と高い割合となっていた。一方、SH、SO、CTB、BK3 に関しては 10%以下となっており、SH に至ってはわずかに 2%であった。また、BK3 に関して他の 4 大学がいずれも 18%以上の比率で選手を獲得しているのに対し、明治は 7%であった。

最後に帝京は BK3 の選手の比率が 27%であり、全体の 4 分の 1 以上を占めている。対して SH、SO、CTB はそれぞれ 5%に留まった。

5 大学を比較すると、慶應は BKR、筑波は LO、明治は PR、早稲田、帝京は BK3 とそれぞれの大学で最も獲得しているエリート選手の割合が高いポジションは異なるという結果となった。

第４章 考察

2004 年度から 2013 年度に在籍した全部員の背景、および各大学の入試制度を調査したところ、各大学の入試関連制度の差異があり、各大学の輩出校、戦力輩出校、エリート選手であるユース代表選手の獲得に大学毎の特徴があることが分かった。

第１節　　選手獲得

大学毎の選手の獲得状況で特筆すべきは 3 点ある。ユース代表選手の獲得、強豪校からの獲得、部員輩出校と戦力要員輩出校について考察する。

第１項　ユース代表選手の獲得

一点目はユース代表選手の獲得である。ユース代表は入学生においてはトップクラスの選手である。ユース代表は毎年 50 人程度いる。この選手を獲得することはチーム強化には欠かせない。早稲田は、2002 年、2004 年、2005 年、2007 年、2008 年に大学選手権を制しているが、2002 年から 2006 年にかけてユース代表選手獲得人数とユース代表選手の所属人数が上昇している。つまり早稲田は優勝時にユース代表選手が 10～20 人所属しており、ユース代表選手が多数存在することによって結果を残していた。同様に近年連覇を果たしている帝京は 2009 年に初めて優勝した際の所属人数は 11 人で、その後も 9～11 人で推移している。したがって、一定数ユース代表経験選手が在籍することは大学選手権を勝ち抜く上で重要な要素であり、そのような選手の獲得がリクルーティングで重要となることが今回の研究でも示された。

しかしながら、一方で早稲田は近年においても優勝時の約 85%のユース代表選手を要し、その平均人数は帝京よりも多い。この事実から、帝京のように抱えるユース代表が 10 人、毎年２～３人の加入であれば結果が残せ、かつ連覇が可能なことが証明された。以上の点から、ユース代表選手の単純な獲得人数だけではなく、質も影響されることが考察でき、帝京は極めて優れたリクルーティングが行えていることを示すと考える。一方、逆の例では早稲田が象徴的である。2006 年から 2009 年にかけてユース代表選手を多く獲得できていたが、その構成はとても偏っていた。2006～2009 年は BK 選手をたくさん獲得したが、2010 年のユース代表選手は全員 FW だった。つまり、2006 年からの戦力要員となりうるメンバーの偏りが 2011 年からの低迷期を招いたのかも知しれない。優れたリクルーティングの例として、アメリカの大学バスケットチームのリクルーティングに関する先行研究がある（Treme ら 2015）。この研究では有望選手であってもポジション毎に育成にかかる時間が異なることを示し、ポジションを意識した戦略的リクルーティングの重要性を示していた。帝京でのユース獲得や選手獲得は先行研究のように戦略的な取り組みがなされていたのかも知れない。入試の違いや学費等の違いをふまえると、他大学においてはさらに戦略的なリクルーティングの実施がなければ有望な選手獲得が困難になることが示唆され、勝利への道が遠のくことも考えられる。

さらにユース選手が戦力要員として活躍しているかについて検討した。リクルーティング対象と思われるユース代表の約 56%が戦力要員となることが分かった（Max61.5%、Min 49.2%）。対象期間の前半 5 年平均で 53.1%（Max72.9%、Min 42.4%）、後半 5 年平均で 59.4%（Max77.3%、Min 44.4%）であった。これはリクルーティングで獲得した選手が一定は活躍していることを示すものであろう。一方、ポジション別の比較では、対象期間の平均人数では、早稲田、筑波は FW、BK が 5.0、5.1 と 1.3、1.4、明治は 5.9、1.4、帝京 1.6、2.3、慶應 1.2、3.2 であった。明治が FW に重点を置いてリクルーティングをし、戦力となっていることが推察される結果であり、戦略的リクルーティングが行われていることを示唆する結果と考える。またユース代表経験者でも 1 年生からプレイできていたのは 0.86 人であった。この事実を認識し長期展望を持った戦略的リクルーティングをおこなうべきである。

今後どのようにして戦力となるユース代表を獲得するか、そしてどう育てるかは大きな課題である。

第２項　強豪校からの獲得

次に強豪高校からの獲得である。ユース代表には選ばれなかったが、有望選手が多くいると考えられる強豪高校からの選手獲得もリクルーティングでは重要な要素である。強豪校、新興強豪校はそれぞれ各大学の戦力輩出校にもなっていた。帝京は本研究の調査期間(2004～2013)内の全国大会で好成績を収め、常連校の仲間入りを果たした御所実業、京都成章、荒尾、長崎南山といった新興強豪校から多くの部員及び戦力要員を獲得していた。一方、他大学は伝統強豪校である常翔学園、國學院久我山や調査期間(2004～2013)内の全国大会で優勝経験のある強豪校の東福岡、啓光、桐蔭などから戦力要員を多く得ていた。帝京では、強豪校として名が広まる前、頭角を現しはじめた時期にその高校からの選手を獲得しているケースがあった。戦力輩出校との信頼関係を維持するだけでなく、チームの勝利のためには新興校も含め勢力地図が絶えず変化する強豪高校との連携ができるよう無名校時代からの関係構築もリクルーティングには必要となる。

5 大学の戦力要員となった選手のうち、戦力要員輩出率 200%を超える高校は 6 校に限られていた。そして 6 校のうち、4 校は九州に存在する高校、また前述した強豪校に含まれていたのは東福岡と桐蔭だけであった。強豪校との連携だけでなく、関東の大学にとっては、九州対策を充実させることがリクルーティング成功の鍵かも知れない。関東近郊だけでなくあらゆる地域へ出かけ多くの高校を訪問し情報網をはり選手を発掘することは大学ラグビー部指導者として重大な業務となるだろう。伝統強豪校、新興強豪校との連携強化はリクルーティングの重要課題と考える。

第３項　部員輩出校と戦力要員輩出校

主な輩出校は 5 大学でほとんど重なっていなかった。この事実は高校毎に進学しやすい

大学があるということを表していると推察される。つまり、高校と大学の指導者間の信頼関係が構築されているところに進学しやすいということを裏付ける結果である。最後にリクルーティングには高校指導者や保護者との関係も重要である。とくに監督の任期が短い大学においては高校関係者との継続的な信頼関係の構築に支障が出ることが考えられることから、充分な配慮が必要である。

また戦力要員輩出校は 5 大学とも部員輩出校上位 15 校に含まれていた。しかし、早稲田と慶應には附属校という他大学との違いがあった。両校とも戦力要員輩出校に附属校が含まれていたが、いずれもその輩出割合は 40%以下であった。早稲田の場合は 37 人中 11 人が戦力要員、慶應は 141 中 55 人が戦力要員だった。また、明治では附属校が主要輩出校であるが戦力要員になっていなかった。附属校がある大学は内部進学等で部員を得やすく入部人員が多いため、附属校の強化を促すことによって大学チームの強化でも役立つと考えられる。

長期にわたり多くの部員を輩出しているが、戦力にはなりにくい高校との関係は再度深く考え直す必要がある。原因を探り、前向きに大学と高校の連携した強化などに取り組むことも一策である。

第２節　　入試形態の違い

今回の調査により、各大学の入試形態には違いがあることが明らかとなった。これは各大学の強みにも弱みにも作用していた。スポーツ推薦枠の定員、内定時期、外国人留学生制度に関して考察する。

第１項　スポーツ推薦枠の定員

スポーツ推薦枠の人数がリクルーティングに影響していた。入試形態の違いにより選手獲得枠が大幅に違っていたため、全ての大学がスポーツ推薦制度を元に同じようにチームを強化することはできないことがいえる。また、早稲田、慶應、筑波は推薦枠での人数が限られてくるため、獲得したい選手をさらに厳選して獲得しなければならない。特に、早稲田や慶應は自己推薦入試や AO 入試によって選手が何人取れるかわからないため、不確定要素を考慮して強化の方針を立てていかなければならない困難さが伺えた。一方、帝京、明治は推薦獲得枠が多くリクルーティングには優位な入試制度であった。推薦獲得枠の違いは強化にも影響するかも知れない。

第２項　内定時期

リクルーティングには時期が影響していた。結果より、セレクションの時期で最も優位な大学は帝京と明治であることが考えられる。帝京と明治はセレクションを 6 月に行い、また獲得枠も多いため、他の大学と比較して優秀な選手を多数確保する機会がある。他の大学は 6 月以降にセレクションを行い、獲得枠も小さいため、選手選抜の機会が小さい。

以上の点から、帝京や明治は比較的早い時期にセレクションを行うことで優秀な選手を多数確保できる環境にあり、その他の大学は選手確保の環境で 1 歩出遅れていることが考えられる。

対象校以外に強化を考える大学には、推薦枠を大きく設けることや入試時期を考慮することが強化の早道になるかも知れない。しかしながら、入試に受かった学生をとるという大学の性質をふまえるならば、スカウトする立場にあっては入試制度の違いを十分に考慮したリクルーティングを行うことが不可欠である。

第３項　留学生制度拡大の可能性

外国人留学生制度などを用いた外国人選手の活用もラグビー部強化には一定の役割がある。対象校の中では帝京のみ留学生選手が所属していた。外国人選手がいることはラグビー部の強化だけでなく、国際交流に繋がるなど大学へのメリットも多い。今後の活用を大いに検討すべきである。

第４項　研究の限界

本研究は 5 大学のみを対象に実施しており、大学ラグビー部におけるスカウティングの全てを反映しているわけではない。今後さらに対象を広げ、精査することが必要である。

また、今回の研究では、スカウティングに注目した分析に留まっている。スカウティング以外で入学、入部した選手、浪人して入学した選手の中にも活躍している選手は多くいる。彼らの入学の経緯や入学後の変化についても精査することが、チームの強化全体には欠かせない。今後はさらに対象をひろげ研究を続ける必要がある。

第５章 結論

本研究により、5 大学のラグビー部におけるリクルーティング戦略には、３つのキーワード、すなわちユース代表選手の獲得、強豪校からの獲得、部員輩出校と戦力要員輩出校の一致が明らかとなった。

ユース代表選手の戦略的な獲得、新興校も含め勢力地図が絶えず変化する強豪高校との連携、入学後出場しない人数の多い輩出高校の存在、附属校との効果的な連携、そしてその前提として、各大学の入試関連制度の差異が大きく影響することの把握が大学ラグビーの選手獲得戦略に欠かせない考慮事項となる。

第６章 謝辞

本稿を執筆するにあたり、たいへん多くの方にご協力いただき、お力添えを頂きました。携わっていただきました全ての皆様へ深く御礼申し上げます。

本研究の当初から、担当指導教員の平田竹男教授には多大なるご指導を賜りました。まだ現役のプロ選手として活動していた私を新しい世界に導いていただき、一つ一つの事柄で熱くご指導いただきました。先生にご指導いただいたことは、将来指導者として活動していく私の血となり肉となりました。そして先生には本当の戦いの意味を教えていただきました。先生にご教示いただきました全てのことを、今後はグラウンド内外で実践していきます。本当にありがとうございました。これからも生涯にわたってのご指導を何卒よろしくお願い申し上げます。

また、本稿作成にあたり、貴重なご助言を頂きました副査の中村好男教授、論文技法から本稿作成に至るまで、ご指導いただきました副査の児玉有子先生にも深く感謝申し上げます。また、早稲田大学スポーツ科学学術院において、ご指導いただきました教授及び講師の先生方にも御礼申し上げます。

そして、平田竹男研究室 10 期の皆様、学生修士 2 年制の奥下諒氏、藤井暢之氏、松本尚巳氏と共に過ごした一年間は大変貴重なものでした。10 期生の結束が力となり、最後まで研究を続けることが出来ました。心より感謝申し上げます。

参考文献

1) Jeffrey Pauline. “Factors Influencing College Selection by NCAA Division I, II, and III Lacrosse Players” 2010

2) Cary A. Caro. “College Football Success: The Relationship Between Recruiting and Winning” 2012

3) Julianne Treme, Robert T. Burrus. “NCAA basketball: when does recruiting talent translate into wins for power conferences?” 2015

4) Ross Booth. “History of Player Recruitment, Transfer and Payment Rules in the Victorian and Australian Football League” 1997

5) Erin C Georgeson, Benjamin K Weeks, Chris McLellan, Belinda R Beck. “Seasonal change in bone, muscle and fat in professional rugby league players and its relationship to injury: a cohort study” 2015

6) J. Michael Dumond, Allen K. Lynch, Jennifer Platania. “An Economic Model of the College Football Recruiting Process” 2007

7) Danny O’Brien, Trevor Slack. “The Emergence of a Professional Logic in English Rugby Union: The Role of Isomorphic and Diffusion Processes” 2004

8) 浅沼道成, 古澤久雄, 岡田敏榮, 松下雅雄. “九州における一流高校選手のリクルートに関する研究: 特に進路決定に影響を与える因子について” 1993

9) 早稲田大学ラグビー蹴球部公式サイト, http://www.wasedarugby.com/, 2015 年 4 月 1 日閲覧

10) 帝京大学 ラグビー部 オフィシャルサイト, http://rugby.teikyouniv.jp/, 2015 年 4 月 1 日閲覧

11) 慶応義塾大学ラグビー蹴球部, https://www.kurfc.com/, 2015 年 4 月 1 日閲覧

12) 明治大学ラグビー部公式ホームページ, http://www.meijirugby.jp/, 2015 年 4 月 1 日閲覧

13) 筑波大学ラグビー部 - つくばスポーツ Online, http://club.taiiku.tsukuba.ac.jp/rugby/, 2015 年 4 月 1 日閲覧

14) ラグビーマガジン, 2001 年 10 月号～2014 年 6 月号, ベースボールマガジン社.

15) 日本ラグビーフットボール協会, https://www.rugby-japan.jp/, 2015 年 4 月 1 日閲覧

16) 関東ラグビーフットボール協会, http://www.rugby.or.jp/2015/, 2015 年 4 月 1 日閲覧